

田中龍之介に憑依したので全国三本指に数えられるスパイカーになるべく頑張る話

龍門岩

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺は田中龍之介！前世は超高校級のすげえバレーボーラーだった男！この世界で目覚めてしまったからには、まずしなきゃなんねえことがある！それは……髪を伸ばすことじゃああい！ゴルフ！なんで坊主なんだよオイイ!!!

ってなわけで、超高校級エースが乗り移った田中龍之介が、烏野高校でもエースを目指す話。

※なお、原作開始と共に坊主になったもよう。

作者はバレー経験者ですがハイキュー!!はそうでもないの、原作との矛盾点などがあれば報告していただけると幸いです。

# 目次

ゼロシーズン	1
プロローグ	1
ごあいさつ	5
一本の矛	12
転機	18
閑話：とある記者	28
ファーストシーズン	28
『決意』	32
雛鳥と王様	43
変人たち	51
全国六本の指	58
V S 青葉城西	64
歪んだ人と結ばれた人と	74
エースとは。	84
布石	90

## ゼロシーズン プロローグ

『——さあ、ついにマッチポイント！この一点を沈められるか!!』

耳を劈くように轟く吹奏楽部の音色が、妙に俺の脳内に染み渡る。煩くて喧しいだけであつた声援が、初めて心強いとさえ感じていた。

大観衆が緊迫した面持ちで試合を眺めているのが横目で確認できる。マネージャーも継るように、祈るように両手を合わせている。

仲間がサーブを打った。俺は今前衛のターンでチャンスボールが来ればボールが集まるのは明白だつた。

仲間のサーブ、それは正に三年間の集大成を込めたかの如き威力で相手コートに飛んでいく。サーブスペースで終わる、それも有りか。なんて考えられるくらいには俺の頭は冷静だつた。

そのままノータッチでコートに突き刺さると思われた黄色と青のストライプは、相手チームのリベロの意地により自コートに返つてくる。

——キタ。

思わず笑みを浮かべる俺は、セッターと視線を交わす。セッターも笑みを隠してきれておらず、その表情は俺に一発カマしてこいと暗に脅しているようでもあつた。

いいぜ、決めてやるよ、この俺が!!

「レフトオオオオオっ!!!」

他者の鼓膜を破く勢いでボールを呼ぶ。

セッターも、ベンチも、コート内の仲間ですらレフトと叫んでいた。なんだこれ、と思わず笑みを更に深めてしまう。

そして俺が得意とする、高めでネットから微妙に離れた位置にトスが寸分たがわず上がり——

『春の高校バレー、優勝は星雲高校ッ！大会 MVP は星雲高校の大エース、ウイングスパイカー高坂瑠偉こうさかるとい——ッ！』

目を覚ます。今俺が見ていたのは夢か。いやでも俺の名前は高坂瑠偉なんて名前じゃ……いや俺は高坂瑠偉か。え？いや、元々俺は田中龍之介だろ？泣く子も黙る、あの田中龍之介だろ？え、でも今の誰？高坂瑠偉？俺だよな。うんうん。いやでも俺って名前なんだっけ、田中龍之介だよな。姉さんに龍って呼ばれてるもんな。ああそうだな、俺は田中龍之介だ!!

「……………」

——俺、田中龍之介。どうやら前世の記憶つてもんを思い出しちまったようだ。

状況を整理しよう。

俺の前世は高坂瑠偉。超高校級のバレーボーラーと謳われ、最後の春高全国では優勝、そして MVP をも獲得した超高校級のバレーボーラーだ。(大事なことなので r y )

そして今の俺は田中龍之介。ただいま中学三年生だ。しかし既に鳥野への進路は決まっついていて、あとはヤンチャし放題だ、って時に前世の記憶が蘇ってしまった。

いやそもそもこれは前世なのか？別世界の誰かとも考えられる。高坂瑠偉である俺と、田中龍之介である俺は、必ずしもこの世界で生まれたのではなくて所謂パラレルワールド的なあれがあれでそうなって——

「だーっ！わかるかなこと!!てかバレーがしてえ!!」

田中龍之介になったからか、秘めたる粗暴さや情熱が出てしまう。まずは風呂に入って冷静になろう、そう考えふと全身鏡を見ると――

「……俺、坊主やん？」

その日一番の慟哭が俺の喉を引き裂き、家族に死ぬほど怒られたのは言うまでもない。

高坂瑠偉であった俺は、かなり髪の毛に気を使っていた。世の流行りがウルフスタイルからマツシユスタイルに変わった途端にべらぼうに伸ばしていた襟足をすぐさま刈ったりなど、兎に角髪型には気を使っていた。世にいうイケメンには遠かったせいもあり、半ば憧れのような形で髪型を弄り始めたのがきっかけか。

ヘアカタログで見るとような髪にスタイリングすることさえできるのが、ささやかな俺の特技であったのだ。

それが、なんだ。

坊主？

ふざけるなよ…？

まず初めに決めたこと。それは髪を伸ばして高校デビューまでに間に合わせることだった。

それから約三ヶ月。急に性格が変わったと騒ぎになるのも嫌なので、学校は休んだ方がよいと感じて自宅でトレーニング等続けた。それと同時に進行で亜鉛を毎日摂取したりタンパク質を摂ったりシャンプーを優しくするように意識するなど、髪を伸ばすための努力もしたおかげでスタンダードなマツシユスタイルにまで戻すことができ

た。

前世の俺の身長は約177cmで、最高到達点が3m49cmというところでもジャンプ力であったので、今の174cmという身長は成長することも考えると全く問題はない。

烏野は染髪自由であるため、前世ではできなかつたミルクテイ色とかいうオシャンティーな髪色にして入学式を迎えた。

坊主であつた頃は厳つい顔をしていたが、髪を伸ばして俺の意識が入ることで柔らかい笑みを浮かべる好青年のようになってしまった。家族には誰？とさえ言われ少し凹んでいるが、おそらくバレーボールなどで熱くなると、田中龍之介としての本能が顔を出すだろう。

入学式も終わり、クラスで多少のオリエンテーションをしたあと、ついに待ちに待つた放課後だ。

早速仲良くなった前の席のヤツに別れを告げ、体育館へとひた走る。途中にいちごオレを飲んでるやつにぶつかって相手の制服が汚れたが知らない。着替えは既に済ませてある、烏野の臍脂色をした体育着で俺は体育館の扉を開き――

「あ、入部希望者第一号」

――俺は、女神を発見してしまった。

ぐ)あいさつ

『さて、それではインタビューをしていきたいと思えます。高坂選手、今どのようなお気持ちですか?』

——そうですね。ありきたりな言葉に聞こえるかもしれませんが、小学生の頃から支えてくれた両親、監督、コーチ、応援してくれた皆さん、そして何より、三年間共に戦い抜いてくれた六人の親友達への感謝でいっぱいです。

『そうですね。ありがとうございます。えー、大会MVPは高坂選手ですが、何か特別な気持ちなどは抱いていらつしゃいますか?』

——えー、まあ、すごく嬉しいですね。今までやってきたことが報われたって感じで、自分の力に自信を持つこともできました。

『これまでは自信はなかったということですか?』

——はい。油断と慢心は己の身を滅ぼすと、中学生のとき監督から言われてからですかね、決して現状に満足せずに成長し続けられたと感じています。

『なるほど、素晴らしい向上心ですね。それでは最後となりますが、何か一言、全国のバレーボールファンそして、この舞台を目指すバレープレーヤーに向けてお願いできますか?』

——はい。そうだな……今まで応援してくれたファンの皆様、本当にその応援が心強かったです、これからもバレーボールを愛していただきます。そしてこのオレンジコートを目指して頑張っている全国のバレープレーヤー、努力は決して裏切りません。僕のこの身長でも、こうして大会MVPを取れるほどに成長できました。自分を信じ、仲間を信じ、練習を信じ。中々成果が出なくても、挫折したとしても、最後に蕾は開花すると信じて、日々の練習を頑張ってください。上から目線で申し訳ないですが、応援してます!

『非常に熱いメッセージ、本当にありがとうございます!以上、高坂



溜偉選手でした!」

——ありがとうございます!

——懐かしい記憶が蘇ってきたな。

最後のインタビューは、本当に詩人みたいなことを言っちゃってみんなに馬鹿にされたっけな。でもネットでは粗方好評のようで、しばらくバレーボールの人气が上がったらしい。よく知らんけど。

んにしても、なんでいきなりこんなこと思い出して……?

「……?どうしたの、君。バレー部希望じゃなかった?」

ああそうか、死んだのか。そりやそうだよな、こんなにも美しい女神様がいるんだもの。おそらくだけど、急ぎすぎた挙句に躓いて、階段の角に頭を思いつきりぶつけたんだろう。それ以外に死ぬ要素が見つからない、誰かに刺されたわけでもあるまいし……。

「……ほんとに大丈夫?」

ああ、女神様や……あなたの元で一生働きたい……残業代なしでいいので使いパシってください……ああ神よっ!!!

「な、泣き始めた……澤村呼んだ方がいいかな……」

「あー!くっそ俺が一番乗りだと思ったのに!まあいいや、ここつてバレー部ですか!」

「あ、入部希望者第二号」

「はい、バレー部に入り……は?」

俺は女神様に話しかけ、呆然としている隣のヤツに目を向けた。身長は160cmもなく、金メッシュの入った髪が特徴的で、記憶の中で見たことがある男だった。

千鳥山中のリベロだった西谷夕。ベストリベロ賞を何度も獲得していて、前世を思い出す前の俺も対戦したことのあるスーパーリベロ

である。まさか烏野だったとは。

にしてもこいつもおそらくだが、何かの拍子に躓いて死亡したのだろう。なんとたつて目の前の女神が見えているのだからな。

「め、女神…様…俺は、死んだのか？」

「どうして…？なんで皆固まっちゃうの…」

そして俺と西谷は、先輩である二年生と、他の入部希望者が来るまでそこに立ち尽くしていたのだった。

「あつはつはつは、二人とも面白すぎんべ！」

「す、すみません…」

「あまりの美しさに正気を忘れました…」

そして俺と西谷の二人は、一つ上の先輩である菅原先輩に爆笑されていた。

「清水を見て死んだと錯覚って…ぶわっはは！何者だよお前らア！」

なんだろう、優しくおっとりした感じの雰囲気纏ってるから静かな先輩かと思ったらめっちゃめっちゃテンション高いじゃん。逆に冷静になってきたわ。

「ひーっ、ひーっ、ひーっ…はあ、笑った笑った。んで、二人とも名前は？」

「あ、田中龍之介っス、よろしくお願いします！」

「西谷夕です、オナシヤスツ!!」

「田中に西谷ね、おっけ。多分そろそろ入部希望者全員揃うからちよい待ってて！」

そう言い残して、菅原先輩は大地ー!!と叫びながら走り去っていった。なかなか勢いのある人だったな、見た目とのギャップが凄まじかった。

「おう、俺は西谷タ！気軽にノヤとでも呼んでくれ！よろしくな！」

「俺は田中龍之介、家族には龍とかって呼ばれてる、よろしくなノヤっさんー！」

「おっそれいいな！んじや俺も龍って呼ぶぜ！ポジションはどこだ？」

「もちろんレフト！そういうノヤっさんはリベロだよな？中学ンとき見たぜ」

「やっぱりか!?髪生えてるからわかりづらいけど戦ったことあるよな！すげえ情熱のあるやつだったって覚えてるぞ！」

「ははっそうかそうか！情熱と熱血さだけは誰にも負けねえぜ俺は！」

「おうよっ!!……して龍よ。あの女神様ヤバいな」

「いやほんとにな。美しすぎるぜあれは」

「龍……俺とお前はもう親友だっ！女神様の名前を聞き出しに行こう！」

「いや待て焦るなノヤっさん！どうせこの後は自己紹介をするだろう、その時にさり気なく聞くんだけ、さり気なくな！」

「なるほど……！龍、お前頭いいな!!」

ちなみにさり気なく聞く必要はないと知ったのはそのあとすぐだった。

「二年の菅原孝支、ポジションはセッター、親しみを込めて呼び方はスガさんで！」

「二年の東峰旭です。ポジションはレフト、一応……一応エースみたいなの……?あ、普通に旭でいいよ」

「二年、主将の澤村大地です。ポジションはライトです。そして見ての通り三年生はいない。訳あって皆辞めちゃってな、それでもここに

いるみんなが入部してくれたら試合ができる……！だからぜひ、バレー部に!!」

「澤村興奮しすぎ、私まだ自己紹介してない。……清水潔子です、マネージャーです。皆よろしくね」

実はヤバい人、スガさん。

見た目恐ろしいのに実は内気、旭さん。

見た目通りだが実は熱い、主将大地さん。

そして言わずと知れた女神様、潔子さん。

そして俺と同じ一年は四人。

最強のリベロ、ノヤっさん。

そしてほかの三人、縁下、木下、成田も皆同様バレー経験者らしい。

これで烏野高校バレーボール部は八人（マネージャーを抜いて）。

内一人はリベロで、定員ギリだが確かにこれで試合ができる。

そしてこれから、体験も兼ねた練習が始まるようだ。

女神様にうつつを抜かすのも一度リセットし、俺はバレーボールができる喜びを噛み締める。この三ヶ月、自宅の庭で直上パスをするくらいしかやることがなかったのだ、こんなにも広い体育館でバレーボールができるなんてどれだけ嬉しいことか。

まずは入念なストレッチ。この三ヶ月トレーニングばかりしていた俺とは違い、木下、成田、縁下の三人は受験明けだ、ろくに運動もしていないだろうから体は鈍っているはずだ。ノヤっさんは多分大丈夫だろう（適当）

入念なストレッチが終わわり、アップをし、ペアを作り対人パス——ノヤっさんとやったが当然上手かった——まで終えたところで、一度大地さんの号令で集まることに。

「よし、いきなりだがスパイクを打ってもらおう。西谷はリベロ希望だ

から、清水の投げたボールをスガに上げてくれ」

「はい！」

「よし、皆レフトの方に行けー。旭お手本！」

「え、ええっ!?!」

「ほら、さっさとやんべ！」

「だって皆経験者だし、手本とかいらないんじゃないや……」

「ほら、さっさとやんべ！」

「いや……」

「ほら、さっさとやんべ！」

「………わかったよ」

二年生二人の押し問答が終わり、どうやら最初に旭さんが打つようだ。確かに皆が経験者であるのだから、手本としてスパイクを打つ必要性はあまり感じないが、まあ先輩の実力を見せておくっていうことだろうな。

潔子さんが投げたボールをノヤっさんがAパスの位置にいるスガさんに寸分の狂いもなく上げる。ほんのり逆回転のかかった、セッターにとって最もトスを上げやすいレシーブだ、やはりノヤっさんはすごい。

そしてスガさんのトスは、記憶の中にあるものと似ていた。

なぜならそれは——

ズドンツツ!!!

——少し高めでネットから微妙に離れた、俺の大好物とも言えるトスだったからだ。

思わず口角が上がる。ニヤつきが抑えられない。始まってしまった、俺の癖。愉快なこと、きついことなどがあると楽しんでもしまう俺特有の性<sup>さが</sup>。

俺は前世のパートナーであったセッターと瓜二つのトスを上げるスガさんを見つめ、右の手のひらを思いつきり開く——いつもこれで気合いを入れている——と、スガさんと目が合う。

「え、なに田中笑ってんの」

「いや、いいトスだなって感心したんすよー！」

旭さんのとんでもない威力で放たれたスパイクに唾然とする一年生一同の前で、まさかトスを褒めるなんて誰も思っていなかったのだろう。スガさんですら呆気にとられた顔を晒している。

「ははっ、ありがとな。んじゃ次田中!!」

「え、あ、はい!」

どうやらご指名のようだ。

ここで一発——皆の度肝を抜いてやろう。

ノヤっさんからケツを叩かれながらの激励を貰い、思わずやる気も上がってくる。たかが一年と少し嘗めている先輩達、そして新入部員達……特にノヤっさんには、あつと言わせたい。

レシーブに絶対の自信を持つノヤっさんを驚かせられたら、俺の中の自信も高まっていくだろう。なぜなら、前世でもノヤっさんレベルのリベロは片手で数えられる程しかいなかったのだ、まあもちろん高校生での話だけだな。

潔子さんがボールを投げる。ノヤっさんがそれを完璧にチャンスボールにした。

「レフトオ!!」

気合十分。コンデイション抜群。肩甲骨のコリ無し。

スピードを付けて助走を始め、バレー特有のステップ——四歩助走だ——で飛翔する。助走とは、人工の翼。誰が言ったかは知らんが、正に言い得て妙。

大きく腕を振りかぶり、最後の一步で親指の母指球に全ての体重をのせる。ドンツと大きな音を立て空中に投げ出された俺の身体は、何千何万と繰り返してきたフォームで姿勢を整え——

——一気に腕を振り下ろすツ!!!

『ズダンツツツ!!!』

雷鳴の如き轟音が体育館に響き渡り。

——唾然とした表情を浮かべるチームメイトの顔を見て、俺は溢れ出るニヤつきを抑えられないのであった。

## 一本の矛

『それではスポーツコーナー、金丸きーん!』

『はい!先日行われた春の高校バレー、男子の部、優勝は星雲高校でした!そして中でも注目だったのは、星雲高校ウイングスパイカーでエースを務める、高坂瑠偉選手です。私は高坂選手に、直接インタビューしてきました!』

『——上から目線で申し訳ないですが、頑張ってください!』

『なるほど、堂々とした、そして心に響く熱い言葉でしたね!』

『プレイヤーとして、また人間として大きく成長できるのは、高校部活の醍醐味だと私は思いますね。それでは春の高校バレー、ハイライトVTRです、どうぞ!』

——すごい。

私、清水潔子は単純にそう感じた。

最初は意味のわからない人だった。私の顔を見るなり固まって、涙まで流し始める始末。女神だなんだと、非常に恥ずかしいことを私に言ってくる田中を、少し意識していたのも確かだ。

彼がスパイクを打つと聞いてすぐ反応してしまったのだから、言い逃れはできないだろう。

そして、時は訪れた。

『ズダンッッ!!!』

凄まじい勢いで助走に入り、ダイナミックな腕の振りはさながら翼の如し。そして自信を感じさせる美しい空中姿勢は、空を支配してきた鷹のようであった。

振り絞った弓の弦から放たれる矢の如き強力なスパイクは、轟音を立ててコートへと突き刺さる。軽く1メートルは跳んでいる、いやもはやあれは、飛んでいると言っても過言ではない。

圧倒的ジャンプ力、そこから放たれるパワー、そして溢れ出る自信。  
(……エース)

いつだかに垣間見た、鬼か白鷺か、とにかく全国に名を轟かせる大エースたちを夢想する。スパイク一本で流れを持ち込める、その片鱗を私は田中に見た。

「うおおおおお!!田中すごい!!」

「龍!!お前はやる男だと思ってたぜ!」

菅原と西谷が、田中を褒め称える。もちろん東峰も澤村も、他の新入部員たちも、田中のスパイクを見て目を丸くしていた。私個人としても、田中は今の東峰よりもエースとしての力を備えているだろうと感じていた。

ふと、田中と目が合う。すると人懐っこい犬のような笑顔で、私に向けてピースをしてくる。

ズキーン。

不覚だけど可愛いと思ってしまった。

恋とかしたことはないけど、田中を見ていると少し胸が苦しくなる。

病気かな、と自分を言い聞かせ、火照る頬を隠すように私は俯いた。

潔子さん病気かな。



田中は奇跡的に潔子の照れ隠しを本気だと受け取り勘違いを進めていた。潔子に向けてニカツと笑顔を浮かべた田中だが、実際のところは目が合った恥ずかしさ故であった。

久々のスパイクが上手く決まり潔子は見ているだろうか、と思わず視線を向けたところバッチし目が合ってしまったのだ、笑うしかなかったのである。

「次、縁下！」

「は、はい！」

東峰、田中とエース級のあとに打つスパイカーの気持ちは何たることか。誠に可哀想ではあるが、受験明けとは思えない、しつかりとしたスパイクを打つ縁下ら三人。

そしてさらに驚きがあった。それは160cmにも満たない西谷が、縁下らと同等レベルのスパイクを打ったのである。

リベロとは、チームで最も能力の高いプレイヤーが務めるポジション。そう語ったのは誰であったか。定かではないが、西谷は正に『能力の高いプレイヤー』であることは自明の理。

「今年は豊作だな」

「んだな」

「俺は田中にポジション奪われそうで怖い」

「旭は自信を持って大丈夫だべ！」

「そんな軽く言われても……」

「まあまあ二人とも。よし、集合！」

相変わらず押し問答を繰り返す菅原と東峰を宥め、澤村は全員を集めた。

「これからサーブ練だ、好きなように打っていいぞ」

「大地さんっ！俺カッツしてもいいスカ!？」

「そうだな、西谷の力も見たいし頼む」

「アザーツス!!」

よし、じゃあ始め。

その号令を皮切りに、散開した一年生と二年生はサーブを打ち始めた。

オス、オラ田中龍之介！龍って呼んでくれよな！

そしてこれからサーブ練だ。大地さんが好きなように打てと言うので、好きに打たせてもらおうかっ！

突然だが、俺のサーブは二種類ある。

一つ目はジャンプサーブ。男子なら誰もが憧れる、スパイクのようなフォームでドライブ回転かけて打つサーブである。スパイクのように打つので、誰がやっても威力の高い、サーブエースを狙いやすくなるサーブでもある。デメリットとしては、単純に打つのが難しく、プロの世界でもサーブエースを取れるような威力だと成功率は高くて七割だということ。そしてジャンプサーブを入れにこうとして打つと、緩いドライブ回転のかかった、レシーバー的に最も上げやすい球の軌道になってしまうということだ。

まさに諸刃の剣、しかし成功すればチームの士気は十二分に上がること間違いなしである。

二つ目は、ジャンプフローターサーブ。バレーボールは略してジャンフロなんて呼んでいる。これは全国共通だと俺は勝手に思っている。

普通のフローターサーブと違うところはジャンプすることだけだが、これがかかり違う。高い打点から打つことができるので、威力もボールのブレも大きくなるのだ。

そしてジャンプサーブと違い、ジャンフロには人それぞれのフォームというものがある。千差万別と言つていいほど、人の数ほど形があり、最も自分に合ったフォームを探すことが最初にやることである。

俺も最初は苦労したものだ。

さて、それでは記念すべき一発目行きますか！

エンドラインに爪先を合わせ一旦停止、そして等間隔の歩幅で六回ボールを着きながら六歩分歩く。左手にボールを収め、少し時間を取る。

これが俺の、何万と繰り返してきたジャンプサーブのルーティンだ。スポーツにおいてルーティンは非常に重要な意味をもつ。これが崩れると一気にプレーの質を落とすことだってあるのだ。

軽く前髪を整え、左でドライブ回転かけやすくするように高く上げ、スパイクと同じように助走に入る。

（――トス、いい）

いいジャンプは、踏切の音からわかる。そう教えられてから心臓にしてきた力強い最後の一步を踏み出した。

（――タイミング、ジャンプ完璧）

いつもの、飛んでいると錯覚するようなフォームでボールを見つめ、叩く！

放たれたボールは、久しぶりだからかコースが甘い。代わりと言っではあれだが威力は申し分なしである。

ど真ん中に向かうボールの先には、目を見開き笑みを浮かべるノヤっさん。俺と同じであるのか、楽しいときにやけてしまっているノヤっさんと一瞬目が合った気がした。

ドツパアアアアンツ!!

凄まじい勢いのボールがノヤっさんに到達すると、恐るべき技術をノヤっさんは見せた。

完璧にボールの落下点に入りボールを正面で捉え、インパクトの瞬間に全体重を踵に持っていき後ろに転がりながら威力を受け流す。

あの猪突猛進な性格からは考えられないほどの冷静で静かな、美しいレシーブ。

――しかし、レシーブされたボールはそれでも威力を殺しきれず、ネット超えてしまった。

「……はっはは!! 龍、すっげえな!!」

「ノヤっさんもさすがだぜ!」

「次は完璧に拾うからなっ!」

「はは、負けねえ！」

次はジャンフロ行くぞ。

そう伝えると、ノヤっさんも先輩方も皆驚愕の表情をさらに深めたのだった。

## 転機

『監督、話ってなんですか？』

『ん、ああ、高坂か。なに、一つ報告だ』

『報告、ですか……』

『高坂、突然だが、全日本の真壁監督から招集がかかった』

『……っ!!それは、アンダー20ですか？』

『いや、正真正銘全日本だ』

『そう、ですか。ありがとうございます』

『して高坂。お前の武器とはなんだと思う？』

『俺の、武器、ですか』

『ああ。お前の魅力はそのジャンプ力、最高到達点は日本人の中でもかなり高いな。だが世界と戦うにあたり、そのアドバンテージはどうだ？世界にはもっと高いところから打ってくる選手はごまんという。当然ブロックも比例して高くなるだろう。そうなったとき、お前には何が残る？』

『……それは——』

——あれから色々なことがあった。

体験入部を終えて正式に烏野高校バレーボール部となった俺、田中龍之介は、チームメイト達と実力を伸ばしあっていた。顧問もコーチもおらず、多少ドラダラしていたが、お互いに高めあえることができていただろう。しかし、烏養前コーチが復帰してから平穏な日々は崩れ去った。練習が非常に辛く、激しいものとなったのである。俺や

ノヤっさん、そして二年生の三人はなんとか食らいついていたが、縁下ら三人は耐えきれなかったのだろう、徐々に部活をサボり出すようになってしまったのだ。

俺は前世から仲間想いのところがあるので、ノヤっさんと何度か説得を試みたが、あまり効果はなかった。烏養コーチが来ない日には部活に軽く参加するなど、態度が顕著だったのもあり、二年生らは少しイラついていたようにも感じた。

それでもなんとか試合には来てくれて、春高予選では一次予選を突破するなどそれなりの成果はあげていたが、他のインターハイ予選などは二回戦負けはざらだった。

え？なに？田中俺様がいるのになぜって？

答えは簡単、バレーつての一人じゃできない種目だからだ。一人の意思、目標、熱意に差があれば、チーム内でもすれ違いが生まれるようになってしまふのは自明の理。その点二年生達は、誇りをもつていつでも最高のパフォーマンスをしようとしていたので、若干本気度が足りない俺たち一年生はついていききれなかったのである。もちろん俺は、本気でプレーしていた。しかし春高予選に三年生になつてから出られるかわからない二年生と、まだ最低でも二回は出場できる一年生の間に、熱意において差ができるのは必然のことだったのかもしれない。

バレーは六人で強い方が強い。当たり前のことのようで、実際問題六人全員の意思統一を図ることはかなり難しいのだ。

ちなみに俺と潔子さんの仲に進展らしいものはない。あくまでプレイヤーとマネージャー、俺もあまり部活内恋愛に現実味を持っていないというのもあり、結構仲のいい先輩後輩という位置づけだ。

そして時は流れ、三月となった。

この月に、今年度最後——つまり俺達が二年生に上がる前——の大会がある、その名も“県民体育大会”だ。全国大会などには繋がらないが、まあその一年の練習の成果を出すという意味でこの時期に開催されているのではなからうか。

そして今日これから、俺たち烏野高校と、鉄壁のスローガンをもつ

伊達工業との試合がある。

公式練習が始まり、俺たち烏野高校は先サーブを獲得した。烏野の公式練習は、主にスパイクとサーブのみである。

公式練習は大体各チームに三分が与えられ、その中で練習と撤収を終えなければならぬ。だから実際練習できる時間は二分半程度なのだ。

スパイクを打っていると、観客席から様々な声が聞こえてくる。

『おい、烏野の田中だ。相変わらずすげえ』

『中学んときあんな上手かったか？』

『いるじゃん、高校入って覚醒する奴。その口だろ』

『あーね。ずりいわ〜』

あはは、あはは。もつと俺を崇めよ！褒め称えよ！さすれば、自ずと道は開かれんっ！

……さて、公式練習は終わりだ。

俺たち烏野高校と伊達工業の試合が始まった。ちなみに背番号は一番から順に、大地さん、スガさん、旭さん、俺、ノヤっさん、縁下、成田、木下である。俺は前世と同じエースナンバーである四番を貰うことが出来た。

そしてレフトは旭さんと俺、セッタースガさん、ライト大地さん、センター二人は縁下と成田でリベロはノヤっさん、木下は今のところピッチサーバーでの起用だ。

また、ローテの始まりはこんな感じである。

—— ネット ——

WS 東峰・ MB 成田・ S 菅原

WS 澤村・ MB 縁下・ WS 俺

(MB 後衛時 Li 西谷入)

の布陣だ。なぜ俺が後衛スタートなのかと言うと、強力なサーブで相手の出鼻をくじくことが目的らしい。俺個人としてもサーブは好きなので全く異論はないし、後ろから始まった方がバックアタックなども早めに織り交ぜていけるので効果的なのだ。それに、俺以外にスタンディングのフローターサーブ以外を打つのは今のところ旭さんと木下だけで、その二人も成功率はあまり著しくないので結局サーブは俺からになったのである。

ちなみに旭さんがジャンプサーブ、木下はジャンフロだ。

——試合開始の合図である、主審の笛が仙台体育館に鳴り響く。

既にルーティンは済ませてある。試合の入りとは非常に大事だ。そこから一気に流れを持っていかれる場合があるので特に注意が必要な場面、俺は迷わず攻めて行こうと思う。

(笛が鳴ってからあまり間を置かずに——)

ジャンプサーブ、コースは気にせず威力重視!

試合の始まりは誰もが緊張していて体が硬い、さらに突然サーブを打つ者も多くないのでかなりの動揺を誘えるのだ。前世から俺はこれを活かしてきた。やりすぎると対策されてしまうので、出し所は考えながら、だが。

そして俺の思惑通り、本気の力の九割で放ったサーブはノータッチで相手コートへと突き刺さり、烏野高校は最高の滑り出しをすることができた。

「「っしやあああ!!」「」」

もう一本。

仲間からかけられるこの言葉は、信頼だけではなく軽く脅かされているようにも感じるぜ、俺はな。

結局その後、五本連続俺のサーブは決まり、堪らず伊達工業——伊達工とこれからは略させてもらおう——は一回目のタイムアウトをとる。

「いやあ田中、今日は絶好調だな」

「大地さんアザっす!」

「このまま二十四点頼むわ」



「スガさんさすがにそれは無理っす」

「龍、気負わずいつも通りだぜ！」

「おう、任せろノヤっさん！」

「よし、タイムアウト終了の笛だ。田中のサーブが続いてるが、一本で返ってくる可能性もある、気は抜くなよ！」

「「おう！」」

「いくぞ!!!」

大地さんの一喝により、チームの雰囲気はさらに締まったように感じる。いや、実際締まったのだろう、皆目付きが違う。

——結局その後サーブはとまらず、十点差がついたところでさすがの俺もネットにかけてしまった。

というかめっちゃめっちゃ疲れた。

休んでいる暇はない、次は本日初のサーブカットである。今の後衛は俺とノヤっさん、大地さんなので余程のことがない限りミスはしないだろう。俺は前世からの経験があるし、大地さんもかなりレシーブが上手い、多分俺より上手い。そしてノヤっさんは言わずもがな。

相手のスタンディングフローターサーブは大地さんに飛んでいき、アンダーでしっかりとAパスの位置へと持っていく。そしてスガさんは、旭さんの最も得意なトスを上げ——

——シャツトアウト。

旭さんのスパイクは、伊達工のセンターに完全シャツトアウトされたのである。パンフレットで見たが、確か俺と同じ一年だったはず。名前は……青根。ブロックという点においては凄まじく高い水準で纏まっている伊達工だが、今年の……いや、今年からのブロックの軸は彼なのだろうと一瞬でわかった。

鉄壁と謳われる伊達工は毎年ブロックが強いと聞くが、青根は他とは一線を画している。先程の場面、成田のクイックという線もあつたはずなのにトスが上がった刹那には既にレフトへと動き出していたのだ。視野の広さ、判断力、また身体的ではあるが、手足の長さは本当に一級品である。一年生の時点でこれなのだから、三年生になつたらどうなってしまうのだろうかと若干恐怖を抱いてしまう。

まあ、他校から見た俺もそんな印象なんだろうなあ。

ピッ！

おや？

シャットアウトかと思われた旭さんのスパイクだが、ギリギリサイドアウトだったらしい。実にラッキーだ。

ローテが周り、スガさんのサーブ。スガさんは顔に似合わない性悪サーブを打つことで有名だ。多分。こんなこと本人に言えば怒られるのは確実なので言わないけど。

スガさんの前に落とすサーブを青根が拾い、地味にクイックの牽制をする。相手にはかなり嫌なサーブだ。

Aパスが上がったトスを相手レフトが上手くセンターの成田の横を抜いてクロスに打つが、その先には我らがノヤっさん。

勢いを完全に殺すレシーブで攻撃を最大限に支援する。リベロは直接攻撃のできないポジションであるため、攻撃へのお膳立てが重要な仕事となるのだ。

またリベロは最もコートが見えるポジションなので、ブロックへ指しを飛ばしたり大声で味方を鼓舞したりとやることは沢山ある。

その点で、俺はノヤっさんを最強だと評しているのだ。

スガさんはもう一度旭さんにオープントスを上げる。さつきはラッキーポイントだったのでしつかり決めさせてあげたいというスガさんの気持ちだろう。

旭さんもいつも通りの助走でスパイクを打ち――

(……また、シャットアウト)

――再び青根の手によって、ボールは自コートに落ちた。今度こそしつかり相手のブロックポイントである。

今、完全に青根はコースを読んでいた。

観察していたが、旭さんの視線を見てブロックを少しズラしたのだろう。腕を振り回すというよりかはピンポイントで止めるブロックなので、バックのレシーバーにもあまり迷惑にならない素晴らしいブロック。

敵ながら天晴れだ。

さて、これはかなりキツイな。俺だけトスを集めればなんとかなるだろうが、それはこのチームの方針とは合っていない。俺だけに頼らないようになりたいと皆は口を揃えて言うので、この苦しい場面でそれは崩してはならない。

言い方は悪いが、所詮は県民体育大会。改善点を見つける為にも少し揉まれた方がよいのだろう。

——結局、一セット目は最初のリードが生かせてなんとか先取することができたが、二セット目三セット目と連続で取られ、試合には負けてしまったのである。

帰りのバスは非常に暗かった。特に旭さん。

あの後何度かブロックアウトは取れたものの、スパイクの半分はシャットアウトされたのだ、そりゃ悔しいわな。

ノヤっさんも超反応を何度も見せた。シャットアウトされる凄まじいスピードのボールを手のひら一枚だけで上げるなど、神がかったプレーを何度も見せていたが、ついに伊達工を破ることは叶わなかった。

それに、旭さんは最後の最後でトスを呼ぶことをしなかった、つまりは諦めてしまったのである。

これにはノヤっさんも目を見開いていた。その表情は失望にも憤怒にも取れる表情で、俺も何だか怖くて話しかけることができなかった。

次の日、大会の後ということもあり軽い練習で終わったのだが、その終わりごろに事件は起こった。

「あ？」

「だから、俺が打つてもスパイクは決まんねえんだ」

「……っ!!」一回で決まなくなっちゃっていい!!その度に俺は拾い続ける!だから旭さんはバックを信じて打てばいいんですよ!!」

「はは、その結果が今日のおれだ。西谷は本当によく頑張ってくれたよ、こんな不甲斐ないレフトのためにあんなに……」

「うるせえ!!あんたが諦めてどうすんだ!!あんたはこのチームのレフトだろ、エースだろ!?一番ボールが集まるポジションのあんたがそんなんじや、勝てる試合も勝てねえ!!」

「しようがないだろっ!!俺だって頑張ったよ、それでも無理だった!!」  
「……だから、あんたはあの時、トスと呼ばなかったのか」

「ああ、そうだ。西谷、お前もわかかってるんだろ?俺なんかがいなかったって、田中っていう最強のスパイカーがいるんだ、田中だけにトスを上げ続けられればいいんだよ」

「……ツツ!!あんたはっ!!!」

白熱したノヤっさんは、床に置いてあつたモツプの柄の部分で踏み折り、旭さんへと近づいていき睨みつけた。

「……俺、しばらくバレーやめる」

「!!……逃げんのかよ」

ノヤっさんのその言葉に、旭さんは答えることはせずに無言で歩き去っていく。ノヤっさんはその背中を見つめながら悲壮を浮かべた表情で叫んだ。

「あんたが戻ってこないんだったら、俺も二度と部活にこねえよ!!!」

そうしてこの騒動は収束し、モツプを折られたこと、そして騒ぎを大きくしたことが教頭にバレた西谷は、一ヶ月の部活動謹慎処分を受けるのだった。

その日の帰り、潔子さんに一緒に帰ろうと言われた俺は夜の道を自転車を押しながら歩く。街頭が照らすこの道を潔子さんと二人きりで歩く日が来るなんてな。いつもなら心臓が破裂しそうなレベルで緊張して話しかけまくってそれを紛らわしている所だが、今日はそんな気分にはならなかった。

「ねえ田中。私、何も出来なかった」

「それは……俺だって同じです」

「あの時、どうすればよかったのかな」

「俺にもわかりません。ただ、変に煽るようなことを言っても溝が深まりそうだったので、俺は黙ってました」

「そっか。……私ね、この部活が好きなの」

「……?はい、俺も好きです」

「暖かくて、面白くて、楽しくて。でもやる時はやるって切り替えて。……皆が輝いてて、毎日マネージャーをしながらそれを眺めるのが、私は本当に好きだった」

でもね、と。潔子さんの話を遮らないために俺は敢えて無言を貫く。既に歩みは止まっていて、街頭の下で話を続けていた。

「あんな喧嘩を見たのは初めてで……本当に、何も出来なかった。部員の調子とかを管理するのはマネージャーの仕事なのに、私はそんなことすらできなかつたし、東峰があんなに悩んでたなんて知らなかつた。私、マネージャー失格かな」

「そんなことはないです!!」

俯き、少し涙声になる潔子さんに、それは違うと即答する。あまりの勢いに驚いたのか、潔子さんは俺を見上げていた。案の定、その瞳はしとどに濡れていた。

「潔子さんはすごいんです! 毎日部活が始まる頃にはドリンクたくさん作ってるし、大地さんとか他の部員がして欲しいことをわれわれなくてもすぐに気づいて実行するし、球拾いは早いし! と、とにかく、潔子さんはすごいんです!! 後は、えーっと、あー」

「……………ふふっ」

「え、ちよ、なんで笑うんすか!」

「いや、ううん。ごめんね。でもありがとう、田中。ちよつとは元気出た、かな」

「それはよかったす!」

「でも……ちよつとだけ、胸、借りても、いい、かな」

そう言つて無言で近づいてきた潔子さんは、俺の胸に顔を埋め、僅かな嗚咽を漏らす。俺は抱きしめるべきかどうか非常に悩んだが、さすがに本気で悲しんで泣いている女の子に対して汚い感情は抱けなかつたので、頭を軽くポンポンするだけにした。

俺、前世の記憶を思い出してから、少し天狗になっていたかもしれない。それが今回の出来事に繋がったのだ、旭さんが俺に劣等感を抱いてるなんて微塵も感じなかつたのである。

(気合い、入れなきやな)

——俺は前世では考えられない、ある決意をしたのだった。

## 閑話：とある記者

『——諦めない心』

『うーん、半分正解ってとこだな』

『半分…ですか』

『ああ。正解は、成長し続けられることだよ。高坂、お前は努力したらした分だけ、必ず結果が着いてくる人間だ。既に最高到達点が350cmを超えてるのも、自分でわかっているだろう』

『それが…：俺の力なんですか』

『ああ。お前みたいなやつは、世界中探してもおそらくひと握り程度しかないだろう。世界で活躍している名だたる有名プレイヤーたち、彼らも努力し続けて結果のついてくる…：言わば天才だな。高坂、お前も天才の仲間なんだよ』

『自分ではよくわからないんですけど…：』

『はっ、こういうことは自分でわかってたら逆にダメなんだよ』

『そういうもんですか』

『ああそうさ。高坂、お前は成長し続けられる力がある。決して怠るなよ。向上心つてのは、誰にでもあるもんだ。だからこそそれを一番大事にしろ』

『はいっ！ありがとうございます！ごいます監督！』

『とある記者』

私は月刊バリボーという雑誌の編集を担当する者だ。毎年イン

ターハイ、春高など、全国大会などで活躍した高校生、また大会前に期待できる選手など、様々なトピックを設けて紹介している。

ちなみにプロフィールを話すとすれば、歳は四十二で、妻子がおり、出身は東北の宮城県だ。その繋がりですぐに実家帰りをしてきた所、どうやら今仙台市で県民体育大会が行われているという。

バレーボールで宮城県と言えば、それなりの激戦区だ。誰もが知る絶対王者、二年生ながら全国に名を轟かせる牛島若利を擁する白鳥沢学園高校。その白鳥沢と毎年決勝で争っている青葉城西高校、その中でも注目はセッターの及川徹であろう。

今まで青葉城西は白鳥沢学園に勝つことがないという。その悔しさは部外者の私でも感じるものであり、いつか青葉城西が白鳥沢学園を打倒するのを密かに楽しみにしているのも確かだ。

そんなことを考えながら車を走らせていたら、仙台体育館に到着していた。まだ始まったばかりのようなので、先程あげた注目の二校の試合はないかな、と思いながらも会場に入り観客席の最前列に座る。

県民体育大会はそこまでメジャーではなくテレビ中継はもちろん全国大会にも繋がらないので、よほどのバレーボールファンでない限り一般人は来ないのだろう。

周囲の声を聞くと、どうやら目の前にあるコートは烏野高校と伊達工業高校の試合らしい。

烏野は懐かしい名前だ。実を言うと私の出身校は烏野である。

今から約十年前だったか、烏野高校に黄金時代が訪れた。身長はたったの170cmで、最高到達点も全国と比べれば並。それでもコンパクトなスイングから繰り出されるパワーのあるスパイクと、類まれなる観察眼と視野から放たれるブロックアウトを狙ったスパイクはまさに全国一であった。その選手は『小さな巨人』と呼ばれ、瞬く間に烏野旋風を全国に巻き起こしていたな。

彼の名前はたしか……

おっと、試合が始まる。烏野には少し愛着があるので密かに応援しているが、周囲の声を聞くと意見は様々だった。

曰く、伊達工の鉄壁は並大抵ではない。



曰く、烏野の総合力には勝てない。

曰く、烏野には田中がいる。

曰く、烏野には龍がいる。

凡その勝利予想は半々だったが、何度も聞こえてくる名前は田中、また龍であった。受付で買ったパンフレットを開き烏野高校の欄を見ると、どうやら田中龍之介という名前で、まだ一年生らしい。

それでもここまで注目されるのは、どれだけの力があるのか。今までなぜ注目されていなかったのか。疑問はつきないが、ふと三年生がないことに気づく。なるほど、チームの主体は二年生で大半が一年生というわけか、ならば確かに激戦区である宮城県大会は勝ち上がれないかもしれない。

パンフレットを見ながら思考を回転させていると、大砲が放たれたかの如き轟音が私の耳に飛び込んできた。

なんだ!?

慌ててコートに視線を戻すと、どうやら話題の田中龍之介がサーブスエースを奪ったようだった。音から推測するに、ノータッチだろう。

ひとまずパンフレットは隣の空席に置き、サーブのルーティンを始めた田中龍之介を見つめる。

一年生とは思えないほど様になっているルーティンは、全国に名を轟かせる超高校級のバレーボーラーと大差はないように見えた。

美しいフォームのジャンプサーブは、これまた凄まじい威力と音を奏でながらサーブスエースになる。威力はもちろん、今のサーブはたまたまか分からんがコートの隅——コーナーという——に上手く決まっていた。

——その瞬間に私は確信する。

逸材だ……っ!!

田中龍之介は、既に全国レベル!!

『堕ちた強豪、飛べない鳥』

そんな評価はまさに笑止千万。

今後の宮城県大会。波乱があるとすれば——

「彼ら、烏野高校かもしれんな」

『古豪烏野高校に、“龍”顕現』

東北と言えば、私立白鳥沢学園高校の牛島若利選手を思い浮かべるだろう。アンダー19日本代表入はほぼ確実と言われ、力強く美しいフォームにより、その左腕から繰り出されるスパイクは正に大砲。

しかし私は、宮城県の県民体育大会という地方大会を観戦して彼に並ぶほどの一人の選手を発見した。

烏野高校一年、田中龍之介選手である。

弱冠十六歳にしてそのプレーの一つ一つは洗練されており、成長次第では今後の全日本バレーボール男子を牽引していけるポテンシャルを持っていると、私は感じた。

今後の烏野高校、そして田中龍之介選手には要注目だ。

## ファーストシーズン

### 『決意』

——目の前に立ちはだかる、高い高い壁。  
その向こうは、どんな眺めだろうか。  
どんな風に見えるのだろうか。

——『頂の景色』

たった一人では、決して見ることは叶わないもの。  
でも、仲間がいるのなら。

それはきつと——

『なあ高坂。 どうして背の高いやつが有利なんだろうな』

『はあ？ そんなん、 高さが出るんだから当たり前だろ』

『でも、 現に俺たち低身長は全国でも活躍できてるだろ？ お前はその筆頭じゃんか』

『……そうだな。 それは多分、 俺達が"俺達だから"だよ』

『え、 なにどういうこと？ ポエム？』

『ちつげえよ！……なんていうかき、 小さい奴なら小さいなりに努力するだろ？ 筋トレ然り、 技術然り、 戦術然り。 そういうもんの努力を人一倍するだけだろ、 高身長よりも』

『でも、 高身長らだつて努力するだろ』

『ああそうだ、 バレー好きなやつらに頑張らない奴はいないよ』

『じゃあ結局みんな同じじゃん』

『だからさつき言っただろう、 俺達だからこそだつてさ。 まあ、 簡単に

言うんだったら——』

——高さへの渴望。

決意。

この言葉を、人は如何なる場面に陥った時に用いるのだろうか。失敗した時、逆に成功した時。更に具体的に言うならば、愛する者ができた時、親しい者が死んだ時、そして何かを成し遂げようと目標を立てた時。

人生において、人は様々な場面で何かを決意するだろう。たとえそれが不純な動機でもいい、成し遂げようとする強い意志は、人に極大な影響を与え力をくれる。

意志の力とは非常に恐ろしいもので、何かを決意した人間というのは迷いが無くなる。

達成しなければならぬという一種の強迫観念の如き思考が、己が<sup>おの</sup>身体を駆り立てるのだ。

さて、何故いきなりこんなことを話し始めたのか？

そう疑問に思う者も多いだろう。

俺——田中龍之介、十六歳。

「田中……田中、が………ツツ!!!」

「……坊主になつたーっ?!」「……」

——坊主デビューを果たしました。

「いやあ、やっぱいつ見ても田中の坊主は慣れないな」

「あの時はほんつとにビックリしたよ」

「俺なりのケジメっすから!」

時は流れ、今日は烏野高校入学式当日。俺は無事二年生へと進級し、大地さんらも最上級生である三年生になった。心做しか貫禄も増えたように思える。

そして今俺、大地さん、スガさんの三人は、烏野高校排球部と背面にプリントされた漆黒のジャージを纏い、潔子さんの元に辿り着くため新入生蔓延る校舎内を所狭しと歩いていたのだった。

ちなみに、あの"事件"以来、旭さんとノヤっさんの二人は本当に部活へ一度も顔を出していない。何度か旭さんとは校内で会うも、すぐに視線をそらされる始末。

ノヤっさんは普通に挨拶を返してくれるが、部活に戻って欲しいという趣旨の話をすると即答で『行かねえ!』と反応する頑固っぷりだ。

旭さんとはかくとして、ノヤっさんは何とかして欲しいと思う。

「清水お疲れ、入部届けは?」

「うん、今のところ二枚だけ」

「かぁー少ないっ!」

「でもまだ増えるかも」

「潔子さん今日も美しいです!!」

「……う、うるさい黙って」

「事実を述べてるだけじゃないですか!」

あの日以来、潔子さんとの仲も良好だ。練習中に見つめられてる時間も増えたし、週三くらいで一緒に下校もしている。

え、なんで見つめられるのかわかるんだって? そりや愛の力というか視野の広さというか?

ああ、一つ言うべきことがある。それは本格的に潔子さんに恋をしたということだ。前まで部活内恋愛に否定的だったが、そんなもんは

関係ないと知った。全く、恋は盲目なんて誰が考えたんだよその通りじゃないか。

「ははっ今日もラブラブだなく」

「いつ結婚式上げるん？」

「……っ、だから違うってば」

「照れる潔子さん可愛い」

「っ！もう知らない、早く三人とも体育館行け！」

そう言つて、潔子さんは紅潮した頬を隠すかのように振り向き早歩きでどこかへ言つてしまった。

「……後で謝つとくか」

「んだな、調子乗りすぎたべ」

「俺もつすかね？」

「連帯責任、部長命令」

「それは横暴じゃあ!？」

やんややんやと言ひ争いを始める俺たちのことを、周りの新入生たちは不思議そうな顔で眺めてくる。だが、坊主になったことで悪化した人相の悪さが威圧感を与えるのか、皆、反応は一樣で目を逸らすのだった。

気づけばもう体育館近く。思わぬうちに歩を進めていたらしい。やはりバレー部は暖かい、潔子さんがそう評したのを今ではなんの疑いもなく鵜呑みにできる。

だからこそ早く、あの二人には戻ってきて欲しいと強く思うのだ。ムードメーカーと『エース』は戻ってくるべきである。

え、なぜ旭さんをエースと呼ぶのかって？

そりやもちろん、俺は大エースだからさ。

これは驕りでも慢心でもない。

調子にも乗ってない。

大エースの俺と、エースの旭さん。俺達は二人揃つて漸く烏野高校の矛盾なのだ、旭さんが欠けてるなら俺はただのエース、俺だけにボールが集まりチームが転けてしまうのは目に見えるだろう。

「いやあ、北一のセッターがまさか烏野に来てくれるなんてなく」

「いやそれなー、でも性格キツそうだよな」

「もし舐めてかかってきたら身の程を俺が教えますよ!」

「やめとけよ田中」

そういう大地さんの顔はあまり笑ってないように見えた。こええ、やっぱこの人貫禄増しただろ……。

体育館に入ると、既に新入生だと思われる二人がボールを持っている。何だか言い争いをしていたかのような殺伐とした雰囲気か二人の間に漂っている。

だがそれに気づいたのは俺だけで、大地さんとスガさんはわかっていないようだった。

「おっ、影山だな」

「あ、はい」

「よく北一から来たな」

「結構大きいね、身長は?」

「180cmです、まだまだ伸びる予定です」

「でつかいな」

俺は三人が会話している中で、もう一人の方がソワソワしながらちわッスを繰り返しているのを確認した。だが話し声にかき消されて彼の声は届いていないようだった。

「大地さ……」

「ちわッス!!」

そこで彼の、一際目立つ、声変わりしていないかの如き高めの声が体育館に響いた。影山に夢中だった先輩二人も、驚きながらも彼を見る。ついでに俺も観察した。

身長は160cmくらい、ノヤっさんよりも高いな。オレンジ色のパーマがかかった髪が特徴的だ。そしてこいつを俺は知っている。

去年、大地さんとスガさんの三人で中総体を見に行ったときだ。北一——北川第一の略称である——の試合、またそのついでに光る原石を見つけよう、などと意気込み朝イチから会場入りしたのはいい思い出だ。

その北一の初戦、相手チームの1番でキャプテンだったのが、この

小さいヤツ、日向翔陽だったってわけだ。

なぜ覚えてるのか。それは単に、俺達が中総体を見に行った動機の一つであったからに過ぎない。

——光る原石。まさに日向がそうだったのだ。

驚異的な跳躍力<sup>パネ</sup>、反応速度、コートへの執念、勝利への渴望、諦めない心<sup>ガッツ</sup>。全てが揃っていたが、肝心の技術は稚拙でバレー初心者のようにであったのも印象的だ。

しかし、逆に技術が身につけば。

それはそれは大きな力と成りうるだろう。

身長<sup>タツバ</sup>はないが大きな矛——まるで小さな巨人だな。しかしそれだけのポテンシャルを日向は持っている。

あと間違いなく、今の俺よりも飛んでいたから記憶にあるのだ、いつかお前のジャンプを越すぞとしばらく気合いが増していた過去を思い出す。

「えっと……う？」

「こいつ、あん時影山と戦ってた奴ツスね」

「っ！つまりもう一枚の入部届けの日向って、お前か」

大地さんはちよつと驚いた顔で日向を見て話し始めた。影山と日向がどちらも烏野に来てくれたことが嬉しいらしい。俺と同じように、あのとき日向に可能性を感じたからなのだろうか？

「俺と大地とそこの田中で去年中総体見に行ったんだけど、そこでな」

「そツスね、バネもあってガッツもあったの覚えてるぜ」

「う、え、え、アザース！」

「にしても、あんま育ってねーな。さすがにもうちよいでかくなってると思ったぜ」

「うぐっ……せ、成長期はこれからです!!それにつ！」

——小さくても、俺は飛べます！

そう答える日向の顔は、ある意味決意した人間の顔をしていたのかもしれない。この烏野にきた目的、それを叶えるために頑張ろうとする人間の顔だった。

「烏野のエースに、なってみせます！」



へえ、と。思わず口角が吊り上がる。

いかんいかん、静まれ俺の性よ。これだから、この癖に気づいた縁下にドMだと言われるようになってしまったのだ。

「おいお前、相手はあの田中さんだぞー!」

「は?なに有名人?」

「…っ、お前は月バリも見ねえのか!?そこにいる田中龍之介さんは、東北でも一二を争うレベルのスパイカーだぞ!」

「え、ええ、うええ!?す、すみませんすみません、生意気な口聞いちゃつてすみません!!」

「ははっ、いいってことよ!俺は先輩だからな。にしてもエースになりたい、か。そう豪語するからにはそれなりの覚悟はあるんだよね?」

「……っ!」

俺は若干の威圧感を放ちながら、目の前の日向を見下ろし言葉を紡ぐ。

「エースは攻撃の最期の砦。ボールはたくさん集まってくるし、決めきれなければその重圧に押しつぶされちまう」

旭さんが脳裏に浮かぶが、気にしない。

「それでもお前は、エースを目指すのか?」

まるで尋問だった。俺は少しやり過ぎたかな、と、俯きながら肩を震わす日向に声をかけようとした、その刹那――

「はいっ!!俺は小さな巨人に憧れてこの鳥野に来ました!!だから俺は、俺は……絶対にここでエースになります!!」

——こいつ……ッ!!

何の迷いも、濁りもない、純粹無垢で空を渴望する日向の眼差しに、俺は確かな可能性を感じると共に多少気圧されてしまったのである。

「お前。そういうからには、ちゃんと上手くなってんだろうな。下手くそにはエースは務まんねえぞ。それに田中さんを超えるなんてのも以ての外だ」

「んぐっ!?!」

「ちんたらしてたら、また三年間を棒に振ることになるぞ」

「……っ!!今までのぜんぶ……全部無駄だったみたいと言うな!!」

だんだんと白熱していく、二人の口論。なるほど最初の嫌な雰囲気はこういうことだったのか。

大地さんが影山と日向を宥めようと声をかけるも、それを遮りまともや口喧嘩を初めてしまう。

あ、これ、やばい。

大地さんの頬が引き攣っているのが横目でわかる。既に大地さんは怒り心頭だろう、ならばこういうときは触らぬ神に祟りなし。俺はスガさんと一緒にササーつと彼ら三人から離れた。

その大地さんが噴火する前に教頭が来たがそれすらも無視する始末。だが教頭の前でおいそれと怒鳴ることの出来ない内心は、それこそマグマのように燃えたぎっているだろう。

そのあと、影山のサーブをレシーブするという勝負になったが、案の定日向は取れなかった。にしても、影山はジャンサー——ジャンプサーブの略称——か、やるなあ。

「影山のサーブ、強烈だなやつぱ」

「まあでも田中でちよつとは見慣れてるからな、大地なら余裕だべ」

「それはわからんが……おい!次で最後にしろ!絶対だ!」

「ふむ、さつきから部長である澤村くんの話聞いていないけど、これは問題ではないのかね?」

大地さんの最後だぞ忠告に返事もしない一年二人への怒りを深める大地さんに、教頭からの追い討ちでそろそろ噴火しそうな気配はある。今回かなり焦らされてるから、どデカイ噴火になりそうだな。

——そこで事件は起きた。

影山のサーブを日向は弾いたのだが、その方向がマズかった。見事に教頭の顔面にぶつかり、その頭からカツラが吹き飛んで大地さんの頭にすっぽりとハマってしまったのである。

「…あれツラだったのか」

「影山お前気づいてなかったのかよ、俺の周りは皆気づいて笑ってたぞ」

「ちよ……お前らマジ勘弁……!!」

耐えきれず俺は笑ってしまいが、大地さんと教頭はどちらも無表情で、神妙な顔つきをしていた。

「……澤村くん、ちよつといいかな」

「……………はい」

「幸い、お咎めはなし、謝罪も要らない。ただ、今日見た事は全て忘れてのことだ」

そのあと再び口論を始めた様子をみて、俺とスガさんはまたこっそり二人のそばから離れた。

「鳥野は強豪だった。数年前には全国にも行ったしな。俺も、リアルタイムでそれを見て、鳥肌が立ったよ。何度も見かける近所の高校生が、この舞台上で戦ってんのかつてさ。だから——もう一度、あの場所に行く」

「取り敢えず全国出場。そんなことを言う高校はいくらでもありません」

この言葉には流石の俺も多少苛立ち、訂正させようと影山に詰め寄りかけるが、スガさんに袖を掴まれて首を振られる。なるほど、今は大地さんのお説教だ、首を突っ込むなどということだろう。それにここで割り込んだら、話を絶った罪で罰せられるかもしれんしな。

「安心しろよ——本気だ」

その一言に、影山だけでなく俺も少し怖いと思ってしまった。やはり大地さんには貫禄がついた。断言する。

「だから。俺は別に、お友達になれって言ってるんじゃないのね。中学のときに何があったかは知らないけど、鳥野のバレー部に入った以上はネットのこっち側だってこと、自覚しなさいってことなんだよね」  
そして更に噴火が止まらない大地さんは、二人を体育館から追い出してしまったのだ。

まあ、たしかに今の状態じゃ、バレーなんてできないだろう。バ

レーとはチームスポーツ、部員の仲が悪いんじゃ勝てるもんも勝てないしな。

俺も、大地さんに賛成だ。

『すみません、体育館に入れてください！こいつ……ああー影山とは仲良くしますから！お願いします！』

『ちつ、どけ……あの、すみませんでした！俺、ちゃんとこい……日向とも協力します！だからお願いします、練習させてください！』

「大地さん、いいっすか」

「ああ」

俺は扉の前に行こうとする大地さんに一言かける。今度は俺が軽くお説教する時間だ、譲らせてもらいますよ。

体育館の扉を開け、影山と日向に対面する。

「……!!入れてくれるんですか!」

「いやちげえよ。いいか影山、日向。俺はな、俺達は、本気で全国を目指してる。あのオレンジコートに立ちたいって思ってる練習してる。影山、お前は確かに上手いよ、日本ユース代表に選ばれるくらいにな。それで日向、お前も俺が最も可能性を感じた奴だ、その運動センスとか精神的なもんは誇ってもいい」

そう褒められた二人は、褒められたのだと理解した瞬間にむず痒そうな表情を浮かべた。

「ただな。バレーってのは個人競技じゃねえ、団体競技だ。レシーバーがいて、セッターがいて、スパイカーがいる。一人では絶対にできない、それがバレーなんだよ。喧嘩すんのはいい、それで高め合えればな。だがお前らは違う、無利益で無意味で、チームの雰囲気悪くするだけの邪魔者なんだ。そこんところわかれ」

ダンっ!!

そう言い残し、俺は扉を強く閉めた。

「田中、俺よりキツイこと言ってるぞ」

「……少し熱くなりすぎましたかもです」

「ふつ、まあ、田中の本気度が改めて知れて、俺は嬉しいよ。うし、田中は部室行つて縁下たち呼んでこい、部活始めんぞ!」

「オスつ！」

旭さんとノヤっさんがいなくても、コンセプトは変わらない。大地さんの熱い言葉を聞いて、更に決意を固めるのだった。

## 雛鳥と王様

『——おい高坂、手抜くな！飛べ！』

『はい、すみません！』

『——高坂、ブロックもつと手出せおい！』

『はい、頑張ります!!』

『——高坂てめえやる気あんのか!?!』

『はい、あります!!』

『——高坂!!』

『——高坂!!』

『——高坂!!』

ああ、もう壊れてしまいたい。

日向と影山が喧嘩をし、体育館から追い出されてしまったその翌日、早朝。俺、田中龍之介は体育館に来ていた。理由は単純明快、朝練をするためである。

実質の部活動禁止を言い渡された彼らだが、大地さんの目の届かない早朝や、体育館を使わない練習ならば許されると考えたのだ。しかし肝心の体育館が空いてなければ意味が無い、なので俺は昨日の練習終わり、大地さんに鍵を返してくると申し出たのである。その鍵をもちろん返さず持ち帰って——

「おっ、日向はよく」

「あ、おはようございます!!」

——こうして彼らと朝練をするために。

まだ日向しか来ていないが、そのうち影山とスガさんも来るだろう。

そしてこの朝練をしようとは決断したのには、実は理由がある。それは大地さんから告げられた、『練習試合』があるからだ。結局日向と影山以外にも入部希望者が二人現れたので、先輩を加えた三人対三人に別れた試合をするらしい。しかもそれで勝てたら入部を認めるという、日向と影山にとってはまさに僥倖の極みであろう。

「今体育館開けっからなく」

「アザっす!!」

「朝から元気いいなお前」

隠しておいた鍵で錠錠し、体育館に入る。まずはネットを立てようと日向に言い、二人で何とか協力して立て終わると、揃って準備体操を始めた。

運動前の柔軟と軽く発汗させるためのアップは、スポーツマンとしては仕事と同義であろうと俺は考えている。

怪我、これはスポーツにおいて最も怖いものであり、最も避けなければならぬものだ。どんなに将来を期待されようが、どんなに運動センスが有り余っていようが関係ない。いきなり動き始めたら誰だっていずれ怪我をするのである。

「うし、対人……はできるか?」

「うえ、き、厳しい、かも……」

「んー、じゃあ俺がボールを投げるから……いや待てよ、レシーブはスガさんに教えて貰え」

「え、なんでですか?」

「ネットは朝しか使えないんだ、なら昼間にスガさんとレシーブをやった方が効率がいいだろ?」

「な、なるほど、さすが田中先輩!!」

「はは、そうだろう!そして今からやることは……」

「もしかして、す、すすすす、スパ……」

「おうそうだ!スパイクフォームの確認だよ」

「スパイクっ!!……フォームの、確認……」

スパイクと聞いてテンションが上がるも、確認まで聞いて露骨にそれを下げる日向は、やはり見ている面白くないと内心苦笑する。ここまですべて感情が先に表に出てくる奴はなかなかいないだろう。

さて、飛んでみてくれ。この言葉を皮切りに日向は感情を昂らせる。よくよく耳を凝らしてみると、小声でフォームを認められてスパイク打ってやる、と言っていた。そんなに小声でもなかったわ。

「うおおおおおっ!!」

弾丸の如き速度の助走、翼のように広がるフォロースルー。どれも初心者とは思えない練度である。そして相変わらずのバネだな。だが――

「どうですか、田中先輩!!」

「日向。お前――まだ飛べるぞ」

え、っと。呆気にとられた顔を日向は晒す。

「それってどういう――」

「おはようございます田中さん!」

「ん、おう、はよ〜」

しかしそこで影山が来てしまったので、日向にその理由を教えることができないまま朝練に入ってしまった。

ちなみにだが、影山と日向には俺が。そしてもう二人の入部希望者――月島と山口には大地さんが入り試合をすることになっている。だが俺がいる時点で戦力過多だとツツコミが縁下から入ったので、本気の七割までという縛りプレイを大地さんに課せられてしまった。

とは言っても、七割までしか出せないのなら大地さんに軽々しくサーブとスパイクを拾われる可能性が大きい。なかなかいい勝負になるのではないだろうか。

「ナイスキーです田中さん」

「おう、ありがとな」

そんな俺は今、影山にトスを上げてもらいスパイクを打っていた。もちろん本番に合わせた七割の力だが、ジャンプはしっかりやっている。日向は遅れて合流したスガさんとレシーブ練習をしているよう



だが、俺がさつき伝え損ねたジャンプのこと、そしてスパイクを打ちたいという欲求が隠しきれておらず、興奮した子犬のような顔でこちらを見ているのが面白い。

「なあ影山！俺にもトス上げてくれよっ！」

「……俺は、勝ちに必要なだと思つたやつにしかトスは上げない。今度の試合も田中さんにトスを集めていく」

「んなっ!？」

その影山の一言に、ちよつと大人気ないと俺は思ったが、深く考えてみるとなかなかいい言葉である。バレーは六人で強い方が強い。そしてそれに必要な要素で一番大きいのは、実は攻撃ではなく防御なのだ。どんなに強力なスパイカーがいても、レシーブが出来なければ意味がない。トスにすら繋がらないからだ。

バレーのプレーは、全てが繋がっている。

それを攻撃大好き日向に教えるための一言だろう、と俺は感心して影山を見ていたが……

(多分あれ、なんも考えないで罵倒しただけだな)

その顔はひどく顰めつていたので違うと考えを改め直した次第である。

「……つて、時間やばい！早く撤収すんべ！」

「お、おっうわもうこんな時間！一年共働けえ！」

「おっす!!!」

気づけばもう始業二十分前。ネットを片付け替えて、としていれば時間はすぐ経ってしまう。急ぎ朝練の痕跡を完璧に消去した頃、それは始業五分前だった。

「んじやお前らまた明日の朝だぞ！」

「オス！」

「日向昼なー！」

「あ、はいっ!!」

全力走行しながらの会話を終え、一目散に自分の教室へと駆け上がり、席に座る。その瞬間に始業のチャイムが校舎内に鳴り響いた。ギリギリセーフってところだな。

そして、朝練をしたのだから当然腹が減る。

早弁を繰り返していたら昼休みには弁当の中身が空になってしまったのだ。くそつ、計算してコンビニにでも行けばよかったぜと後悔するも、後の祭り。

購買にはこのタイミングで飛び出しても既に売り切れているであろう。烏野の購買は非常に優秀で基本なんでも置いているが、それ故に大人気。購買ガチ勢と呼ばれる集団が毎日鎬を削って争っているので食べ物余っている可能性は限りなく低い。

それでも、なんとかパンあたりが残っていることを祈り、無駄足になって余計腹が減るだけかもしれないという一抹の不安を抱きながらも席を立った、その時。

——俺の潔子さんリーダーが反応したのだ。

「田中、いる?」

ひよこつと首だけ教室に入れて俺の姿を探す潔子さん。

それを見つめる俺を見つけて、目が合った瞬間に満面の笑みを浮かべる潔子さん。

多少の急ぎ足で頬を赤らめながら俺に向かってくる潔子さん。

「女神、だ」

「た、田中!」

んぐつ、危ない危ない。あとちよつとで意識が持っていかれる所だった。ほんの数センチ、潔子さんが俺に近かったら卒倒していただろうな。恐るべし、これが女神の輝きかア!

「昨日LINEで朝練って言ってたから、お腹減るだろうって、思ってた……お弁当、作ってきた」

「んなっ!」

お、お、お、おおお弁当だとおおお!?

朝練に疲れた俺に笑顔でお弁当を持ってくる女神……そうか、俺と潔子さんは結婚していたのか?

なるほど、そう考えれば……いや違う、結婚なんてしていない。そうだこれは、俺に好意を寄せるあまり弁当を作ってきてしまったのだ。潔子さんは!!

ぐふっ、ぐへへへ。

そうと決まれば、まずはお礼だな。普通に腹が減ってて何も出来ないところだったし、本当にありがたいつす。

「結婚しよ」

ありがとうございます！

「ん？」

あれ？俺今なんて??

どうして潔子さんはこんなに頬を赤らめているんだ？もしかして今俺は——本音と建前が逆になったのか……？

いや、それは断じて否!!

感謝と結婚願望、どちらも本音だ。つまり入れ替わってしまっただけのこと。これは言い訳すればまだ間に合う!!

「す、すみません。本音と本音が逆になっちゃって。潔子さんもよくありますよね！」

その言葉で潔子さんはついに顔から湯気を出し始めたのである。  
アイエエエエ!? ショート!? なんでショート!?

「ま、ま、まず、ほら、屋上行こ？」

「え、なんでですか？」

「一緒にご飯……食べよう？」

そう上目遣いで恥ずかしげに俺に告げる潔子さん。

——今度は俺がショートしたのであった。

時間と言うのはあつという間。

今日はもう、練習試合当日である。

朝早く、俺は体育館に行くのと既にスガさんがいた。何をしているのかと聞こうとするが、その視線の先を追うと影山と日向の姿。それも影山が一方的に日向に稽古を付けるかの如き激しさでの対人だ。だ

が、日向はついこの間まで素人同然だったとは思えない反応で影山の強打やフェイントに対応している。

(経験不足を補う、圧倒的反射神経と運動センス。そして絶対に影山を納得させてみせるという強い意志)

やはりあのとき。

初めて日向を見た瞬間に感じた可能性は、間違っていないなかった。彼ら二人、絶対にこの試合で何かをしてくれると予感させてくれる。

そして影山が大きく弾いたボール。

さすがにあれは無理だろう、と俺も思った。

だが、日向は違かった。

「なっ、追いつけるはず……!」

スガさんも横で驚愕している。そう、日向は懸命に足を動かしてボールへひた走っているのだから。

このレシーブを何時間も続けてきたのだろう、いくら運動能力お化けとは言っても疲れているはず。それに、あんな意地悪な球出しを見たら諦めてしまうのも普通のはず。

それなのに、日向は顔をぐちゃぐちゃにしながらもなんとかボールの落地点に入ろうと頑張っている。

(苦しい。もう止まってしまいたい。壊れてしまいたい。そう思った瞬間からの――)

『――高坂あ!!』

『俺は……負けねえっ!!!』

『高坂撃ち抜けえええ!!』

『うおおおおおおっ!!』

―― 一歩。

小さく、意味の無い。そんな単純な一歩になるかもしれない。だが、先に踏み出さなければ変わるものも変わらないのだ。

意地、根性、熱血、ガムシヤラ。

これらの言葉が的を得ているようで、しかし違う。今の日向を突き動かしているもの、それはたった一つ。

「……渴望」

俺を差し置いてエースになると豪語するほどの攻撃好き<sup>スパイク</sup>。このレシーブを完遂させなければ一生影山にトスを上げてもらえないだろうという恐怖。そしてその恐怖を跳ね除け、自らで影山を納得させてやるという強い決意。

ふわっと。

美しい曲線美を描いたトスがレフトに上がる。

（ああ、よかったな。疲れてるだろうが、トスが上がったぞ日向。ならお前は絶対に——）

ズダンッ！

（嬉嬉として打つよなあ）

超スピードでレフトに走り込んだ日向は、目をキラキラさせて影山を見つめている。ああ、いいな。あいつら熱いな。

俺も気合い入ってきたぜ。

……だが七割しか出しちゃいけないってのか。なかなかキツイぜ大地さんも。

「影山っ！俺たちで勝つぞっ！」

「当たり前だ」

「俺も忘れてもらっちゃ困るが……今回の主役はお前らだ。頼むぞ？」

「オスっ!!!」

そして続々とバレーボール部員が集まり、最後に到着したのは月島と山口——練習試合の相手だった。

「それじゃ、楽しくやろうよ、王様」

——決戦の火蓋が、切って落とされた。

## 変人たち

『続いているコーナーは〜!』

『フューチャーモンスター! 未来のヒーローを発掘します! 今日愛知県立星雲高校に行ってきました!』

『この高校にいるフューチャーモンスターは、この人っ! 高坂瑠偉君です!』

『インターハイ、春高共に三連覇という高校バレー史上初の快挙を成し遂げた星雲高校の、まさに立役者! 私達はその練習を覗いて見ました!』

『いやあく、しかしバレーボールの花形であるスパイカー、それも大エースの高坂君に注目が集まるのもわかるんですけど、僕はその他の選手も見てほしいんですけどね』

『なるほどそうですね! 星雲高校の高坂君世代は、巷では黄金時代と呼ばれているそうですよ〜!』

『いやまさにその通り! 全員が高校トップレベルの選手ですから、高坂君だけが強いというよりも星雲高校が強い、と言う方が正しいかもしませんねえ』

『はい、皆さんありがとうございます! それでは高坂君に、座右の銘を聞いてみました! それはズバリ〜!』

——水滴石を穿つ。

俺がこの言葉を知ったのは小六の頃だった。

あれは丁度国語の授業だったか。ことわざと四字熟語を覚えよう、という趣旨でプリントが配られていて、その中にこの言葉があったのである。

ちなみにこのことわざの意味は、至極単純だ。

僅かな水滴でも、絶えず落ち続けることで硬い石にすら穴をあける、ということから、小さなことでもコツコツ継続すれば大きな成果として自らに返ってくる、という意味がある。

小六の時点で既にバレーボールはやっていたが、まさかそれが人生の座右の銘になるなんてあの時は思ってもみなかったな。

バレーボールにおいて、何物にも代えがたい絶対的な才能とは身長である、というのが俺の持論だ。身体的な差というのは努力では中々埋まらないもので、それ故に人は高さを渴望するようになるのである。

——水滴石を穿つ。まさに俺はそれを信じてバレーボールを続けてきたと言っても過言ではないだろう。

実際俺は、石を穿てたのだ。

「それじゃ、楽しくやろうよ、王様」

月島のその一言を皮切りに、練習試合もとい、影山日向の入部試験が開始した。

「げっ、相手には東北の龍がいるジャン。キャプテンこれどうなんですかあ？」

「ああ、田中には七割くらいで頼むって言うてるから、多分大丈夫だと思うぞ。まあそれでも田中が強いには変わりないけどな」

そう言つて苦笑いする澤村に、本当に嫌そうな顔を隠しもしない月島は諦めたかのようにため息を吐いた。しかしその後には影山と日向を見つけると、勝算はここにあり、とでも言わんばかりの煽りを始めたのである。

もちろん単細胞二人組には効果覲面。いくら天才と運動能力お化けとは言つても、所詮は自己中の王様と跳ねるだけの初心者だ、冷静じゃなくせば全然勝ち目はあると、月島な内心ほくそ笑む。

かくして試合は始まった。

山口の放つたサーブを田中がきつちりオーバーで影山に返し、影山はそれをレフトで待つ日向にトスを上げた。

(俺にもトスが上がるんだっ!!高校一発目の試合、そこでスパイク!決めてやるっ!)

意気込み、身体に染み付き始めたいつものフォームで姿勢を整え、日向は渾身の一発と言わんばかりにスパイクを打つ。がしかし、月島にシャットアウトされてしまった。

「ほんと、君よく跳ぶね。それであとほんの三十センチ身長があれば、ヒーローだったかもね」

「ぐぬぬっ……!」

「おい日向」

「つ、次は決める!だからもう一本!」

影山は日向になんて声をかけようとしたのか定かではないが、日向の闘志に満ち溢れた瞳を見て不敵な笑みを浮かべたので、影山も気合が入ったように見えた。

続いて山口のサーブ。これは日向に向かっていったが、苦しいスパルタ練習の成果が出たのか綺麗にAパス位置へサーブカットをしたので、影山は体制に余裕のあるライト側。つまりは田中にオープントスを上げたのだ。

(いや、ほんつといいトス)

いいセッターは、スパイカーに自分は上手いと錯覚させるとはよく言つたものだ。菅原は菅原で田中の好みのトスを上げるのだが、やはり影山は何枚か上手に見えるのである。



(七割。結構キツイけど、やりようはいくらでもある)

田中はトスと相手コートを観察しながらジャンプする。ブロックは月島と澤村の二枚。バックの山口の位置を見るとワンタッチ狙いだろうと田中は推測した。

(狙いを定めて——打つ！)

ライト側から打つ田中から見てクロス側。月島の右手の小指近くを目掛けて放たれたスパイクは、田中の狙い通りに大きく弾かれ壁に激突したのである。

「田中さんナイススキーです！」

「ナイススキーですっ!!」

「ありがとなー！」

影山と日向は田中を賞賛するが、やられた側の月島も歯噛みをしなから内心で感心していた。

(最初は月バリ嘘言ってるのか思ってたけど、これは本物。あー田中さんにトス集まったら勝てる確率低い、ってか正直無理デショ)

最初に見せた、安定を感じさせるレシーブ力。日向にも負けないバネ。七割になるうが、少なくとも月島よりも高いパワー。そして冷静に相手コートを分析した上で、力の入れにくい小指に正確にスパイクをぶつけるコントロール。

(東北のウシワカ、東北の龍。どっちも宮城県だなんて運命ですかっで感じ)

この瞬間に、月島は田中龍之介という人物を認め、尊敬したのである。自分で見たもの、つまりは正確な情報しか信じない月島らしいと言えはらしいが。

しかしそんな月島にもプライドはある。

(——ただ黙って負けるのは、癪に障る)

月島は人知れずその瞳に決意を浮かべ、長袖のウォームアップTシャツの袖を捲りあげた。

俺——田中龍之介は混乱していた。なぜかって？

それはな……。

「それでその王様は、チームメイトすら追いつけないような横暴で自己中なトスを上げ続けて、終いにはトスを上げた先には誰もいない。正に自己中セッター、横暴な独裁者。——コート上の王様、だよねえ」

……試合止めてこんな長話するなんて。

(普通じゃねえ!!)

だが、その内容自体は非常に興味深いものだ。影山はとんでもなくバレーが上手いというのは周知の事実。であるのにも関わらず中総体で北一が優勝できなかったこと、王様という言葉への過剰な反応。そしてなぜ数ある高校の中からこの烏野を選んだのか。

「——でも、それって中学ん時の話だろ?」

「っ……だから、その王様は」

「でもちゃんとボールきたっ!」

「っ!!」

日向のその言葉に、影山はカツと目を見開いた。なるほどたしかにそうだ、中学の話なんて関係ない。むしろ日向には、中学のことを思い出して感傷に浸っている影山が非常にダサく見えているのだろう。

日向が通っていた中学に男バレーがなかったのにも関わらずバレーを続けてきた日向に、相棒と呼べるようなセッターはいなかったのだ。だからこそトスを上げてもらえる喜びも、その価値も、人一倍理解できるのか。

バレーボーラーが忘れがちで、酷く単純なこと。

——バレーボールは、全てにおいて繋がっている。

日向はそれを教わらずとも心情にしているのかもしれないな。と、俺はなんとなくそう思った。

「いいか、日向。お前は自分の最高のスピード、そんで最高のジャンプでスパイクに入れ。ボールは見なくてもいい、俺が持っていく」

「……は?持っていくって、なに」

「いいから俺を信じて飛べ、日向」

そう影山に言われた日向は、渋々ながらも頷き相手コートを見据えた。だが次のサーブは俺だ、チャンスボールがこなきや影山がやろうとしている面白そうなことができない。

「すみません、大地さん」

俺はこの後輩二人のやることを見てみたい。だからすみません、ルール破ります。

（――九割ッ!!）

全力のパワーに最も近い九割の力でサーブを放つ。それも大地さんに、である。予め力を出していくと伝えれば拾えただろうが、さすがにルールを破るとは思わなかったのだろう、大地さんは反応が一步遅れサーブを大きく弾いてしまったのだ。

「チャンスボールウウウウ!!」

そのまま俺はファーストタッチをアンダーで影山の真上の位置へと持っていく。日向は既にレフト方向に走り込んで、影山がボールに触る前に飛んでしまっている。

（いや、日向はやす――）

ズダンッ!

と、気づいた時にはボールは相手コートに転がっていたのである。

――今、何が起こった？

俺は確かに日向の姿と影山のセットフォームを見て、ブロックフォローに入ろうと走り出そうとしたんだ。しかし日向のジャンプが早すぎる、それじゃあ速攻は合わないと危惧したその刹那。日向はもうスパイクを打っていたのである。

「うおおおおおっ!?!すっげえすっげえ!なあなんだよ今の!なあ影山あー!」

「はあ、喜びすぎデショ。一本のまぐれじゃん」

「おい、今……日向、目エつぶってたぞ」

「「はア!?!」」

大地さんの衝撃の一言に、俺と月島、そして影山が驚愕の声を出した。さらに俺はその瞬間、とんでもないことに気がついてしまったの

だ。

目を瞑った日向に、あの速度のトスを寸分違わず日向の振り下ろされる掌に持つていった。

高精度、なんてもんじゃねえ。たった数センチ、たったゼロコンマ何秒。それだけズレてしまっただけで途端に失敗してしまっような神業。それを影山はたった一回で成し遂げてしまったのだ。

そしてさらに驚くべきは日向である。

いくらトスを見なくてもいいと言われようが、目を瞑って全力ジャンプ、全力スイングなんで俺には不可能だ。

信じる力。いやこれは——脅迫しんぱいとでも言おうか。トスが上がる  
と日向は信じているのだ、それはセッターにとっとなんとしてでもトスを上げなければ、という強迫観念へと昇華するのである。

（——末恐ろしいな）

そして、面白い。

俺は無意識に口角がっり上がっていることに気が付かないのであつた。

## 全国六本の指

『それでは解説の牧野さん。今日の龍王ジャパンの勝利の鍵を握るのはなんですか！』

『はい、私はズバリ、期待の新星高坂選手にかかっていると思います！』  
『なるほど、と、言いますと？』

『高坂選手は今日が初の国際試合ですからね、対戦相手のブラジルにも情報が一切ないと思われれます』

『なるほど、飛び道具と言う訳でもないですが、多少のインパクトは出せるということでしょうか』

『ええ、それに高坂選手は日本の中でもかなり高い最高到達点ですからね、それに上手さもありません。全然世界にも通用するんじゃないですかね』

『なあるほど！背番号は28！高校バレー界に突如現れた超新星は、日本の救世主となるのか！今夜、決戦です!!』

日向と影山の神業速攻が決まってから、試合の流れは一転した。オープン攻撃ではブロックを抜けない日向がクイックを使えるようになることで、サイドの田中がフリーになるのだ。

第一セットは大幅に負け越していたが勢いを取り戻し、逆に日向影山田中チームが先取するという波乱の展開に。

第二セットも影山の集中力は研ぎ澄まされていき、月島らもなんとか食い下がろうとするも結果は日向影山田中チームのストレート勝

ち。よって同時に、日向と影山の入部が認められたのだった。

「ふう〜、田中お疲れ」

「お疲れ様です大地さん」

「いやーにしてもあいつらすげーな」

「そつすねスガさん。まさかあの『なんかこうすごいことできないか』って、あの速攻のことを予期してたんすか!」

「ち、違う違う。俺は日向にもっと打ちやすいトスを上げてやれって意味だったんだけどさ。まあいい意味で裏切られたって感じだよな」

まさにその通りだ、と田中は思う。なにかすげえことできんじやないの、と菅原に言われた影山と日向が何を起こすかと思えば、従来のクイックの速度を遥かに凌駕するクイックを打ってしまったのだから。

だが試合途中で木下が言い漏らした通り、影山の疲労度は並大抵のものではないだろう。あの神業を繰り出すには高精度という言葉では括られないレベルの精密さを求められるのだ、頭が——いや、脳が悲鳴を上げてしまいそうになるはずだ。

さらに言えば、日向も日向で相当疲れているはずである。あの身長で高い壁を躲すには、もちろんクイックというのはいい手だ。だが日向は自身の機動力を生かしてコート内を縦横無尽に動き回っている。予測でクイックに飛びつかれてドシャツト食らう心配も少なくなるのだが、如何せん体力を非常に浪費する作戦だ。日向の無尽蔵に近い体力でなければ一セットももたないであろうことは自明の理。

と、その時。

——ドドドドドドツツ!!!!

バンっ!

凄まじい足音で体育館に何か近づいてきたと思ったら、いきなり体育館の扉が開いたのだ、バレー部全員少しビビっていた。潔子に至っては田中の右腕に抱きつく始末。また余談ではあるが、それを見た日向が田中と潔子の仲について思考を巡らすのだが、それは別の話。

「皆、練習試合が組めたよおおお」

どうやら、今年から烏野高校バレーボール部顧問に就任した、武田一鉄先生のものである。それにしても、練習試合。月バリで田中が紹介されてからというもの、その認知度が集って練習試合をそれなりに組んでいる現在、そこまで慌てて伝えに来ることか、と澤村含め一年生以外が思うが、武田のその後の一言に思わず戦慄するのである。

「練習試合、組めたんだ！県ベスト4の青葉城西高校、そして——東京ベスト4、梶谷学園高校との!!」

——青葉城西高校。県内では知らぬ者がいないほど有名な強豪だ。月バリでも紹介されたチームの中心、セッターの及川徹。非凡なそのゲームメイク能力と、選手一人一人の限界を見抜いた絶妙なトスアップはまさに全国レベル。さらに強烈なジャンプサーブも武器に持ち、自らの力で流れを作ることができるといふ非常に優秀な選手だ。

だが青城——青葉城西の略称——の強みは及川徹、その一点のみではない。エース岩泉一を中心としたスパイカーたちとセッター及川徹のコンビネーションが、青城が強豪と恐れられる所以である。

完成度の高い時間差攻撃。これの根幹を成すのはやはり及川徹であるのだから、やはり青城は及川徹のチームなのかもしれないが。

——そして、梶谷学園高校。

全国五本の指——いや、調子さえよければ三本にすら入るのではと謳われる大エース、木兔光太郎を擁する強豪だ。ここ数年は、強豪犇めく東京都でベスト4をキープしていると言え、その強さが伝わらるだろう。

さらに梶谷の強さは木兔光太郎だけではない、それは青城以上の選手間の連携力にあるのだ。おそらくだが、木兔光太郎を抜いてでも東京でベスト4に入れる実力があるのではないだろうか。まあ組み合わせ次第になるかもしれないが、それだけのポテンシャルと連携力が彼らの強みなのである。

ちなみに、今の高校バレー界で全国に名を轟かせる大エースは六人いる。

白鳥沢学園高校、"東北のウシワカ"牛島若利。

井闔山学院高校、" 関東のサクサ " 佐久早聖臣。

貉坂高校、" 九州のキリユウ " 桐生八。

梶谷学園高校、木兎光太郎。

稲荷崎高校、尾白アラン。

そして烏野高校、" 東北の龍 " 田中龍之介。

異名のついていない木兎光太郎と尾白アランだが、二人とも好調時には抜群の破壊力を発揮するため、実際三本指に誰が入るのかは定かではない。が、今現在は牛島若利、佐久早聖臣、桐生八の3人となっている。

元は全国五本の指だったのだが、田中龍之介がその力を月バリで全国に知らしめたので全国六本の指と変化したのである。

ただし、田中龍之介のみ全国出場経験が未だないので、評価は最も低い。

——とはいえ。

「青城は百歩譲って分かるとしても……梶谷ってどうしてですか先生!？」

「うーんと、僕が聞いた話だと、田中くんがいるかららしいですよ」

「お、俺スカー!」

たしかに今まで田中のネームバリューのおかげで、何校か県内で声が掛かることはあった。しかし、全国に名を轟かせる強豪。それも全国六本の指擁する梶谷が練習試合を組んでくれるとは驚くべきことである。

「その実力が本物か見定めるため、らしいです。しかもしかも! 梶谷学園からのお誘いですからね!」

「な、なるほど……じゃあ先生、もう土下座はしてないんですね」

「してないしてない! 安心して! ああ、それと青葉城西高校の方なんだけど、条件があつてね」

「条件……?」

「うん、なんでも、セッターとして影山君をフルで出すこと。これさえクリアしてくれるなら練習試合を組んでくれるそうさ」

その一言に、若干名の表情が凍りついた。主に菅原、澤村、田中で



ある。特に菅原は言わずもがな、今まで烏野の正セッターとして試合をしてきたという自信と経験があるのだ、この提案はそう簡単に受け入れられるものでは無いだろう。

しかしその予想に反して、菅原はあっさりと提案を受け入れた。こんな貴重なことはそうそうないぞ、と。だがその内心は想像するにたかない。

その後、坂ノ下商店で澤村の奢りで肉まんを食べたり、日向のポジションについて話し合うなど色々あったが、そこら辺は割愛しよう。

「これが、とりあえずは青城戦のポジションだ」

大地さんがそう言って取り出したホワイトボードを見ると、懸念していた日向のポジションが明らかに変わった。

それはミドルブロッカー。ブロックの要で、主にクイックで点を取るポジションだ。故に身長が必須なのであるが日向は約160cm、いくらジャンプ出来ても最も高いところへたどり着くのに必要な時間が他人より多いのだ。

だから日向の役割は、触ること。

月島のように高い壁を早く構築することができないので、日向自身の機動力と反射神経を生かした飛びつくブロックで確実にワンタッチを取り、カウンターに繋げよう、という作戦だ。

まあもちろん最初から上手くいくとは誰も思っていない。それを試すための練習試合だ、有効活用させてもらおう。

そして俺も——思いつきり暴れてやる。

実を言うと、影山だけに注目されていることが少々気に入らないのだ。俺も見ろ、俺を警戒しろ、と。

俺が密かに闘志を高めていると、日向と影山の話し声が聞こえてきた。

「つまり、お前は最強の囷だっ!!」

「うおおお!!最強のっ!!!……囷?」

「ああそうだ。お前がど真ん中で大暴れすれば、サイドのスパイカーが生きてくる。つまりだ、お前がしっかりしなきゃ負けると思え! ……いや田中さんなら三枚でもぶっ飛ばすか」

最後の俺への賛辞は日向には聞こえていなかったようで、要約すると『勝利はお前にかかっている』ということを経山に言われたと思っただ日向は、俺から見ても分かるくらいにガチガチになっていた。

今からそんなんじゃないや本番はどうなるんだよ、と危惧するも、もう遅い。

——練習試合当日。

「ぼえええええええ」

俺は日向にゲロを吐かれていたのだ。

——青城戦が、始まる(遠い目)

## V S 青葉城西

『ブラジル代表との試合、フルセットの末惜しくも敗れてしまいました！しかしこれまでになく素晴らしい接戦でした！格上であるブラジルをあとも一歩という所まで追い詰めたんですがね！』

『はい、そうですねえ。やはり私も予想した通り、高坂選手が光ってましたね〜』

『ええ、素晴らしいプレーがたくさんありました。ここで試合をテレビの向こうで見てくださった皆様の、最も盛り上がった瞬間を計測していました、それはこのシーンです！』

『んうーそうですね！ここは私も痺れました！』

『ブラジル代表のエース、シバ選手のバックアタックを高坂選手が素晴らしいデイク！そこからカウンターでなんと高坂選手のバックアタック炸裂ウ！！パイプ攻撃にパイプ攻撃で返したこのプレーが、最アツプレーでした！！』

『スパイクだけじゃないってところも見せましたよね。ちなみに高坂選手の成績を教えてくださいますか？』

『はい、統計出ております。なんとスパイクは総打数三十八本、決まったのは内二十本！五十%を超えてきました、これはすごい！さらにブロックポイントは二本、サーブエースは三本という好成績。今日のMVPにも輝きました高坂選手です！』

『日本バレーボール界の未来も安泰ですかねえ』

「お願いしやアアアす！！」

日向にゲロられた後、色々あった。潔子さんとイチャイチャしてたら青城の選手二人に睨みつけられたり、影山がそいつらの片方に王様と呼ばれたり、相変わらず日向がトイレに籠ったり……。

既に練習試合が終わったのではないかと思うほどの疲労を俺は味わっているが、まだ試合すら始まっていないのだ。

それにしても、日向の様子がまずすぎる。このままでは試合でハマをやらかすに違いない。俺が鼓舞してあげなければな。

「なあ日向」

「は、はいいいい!?!」

「そんなにビビることあねえぞ! たしかに相手はデカくて上手い。お前の何倍もだ。でもな、そんなの誰だってわかってんだよ」

「……っ!?!」

「コートには六人いて、その全員のプレーが一つの結果へと繋がっていく。誰もお前の活躍なんて期待してないんだよ」

「ちよ、田中、さすがに言い過ぎだ!」

「……だから、迷惑かける! 俺たちはチームだろ!?!」

「っ!!」

「お前の下手くそなレシーブも、吹っ飛ばされるワンチも、全部俺達チームが拾ってやる!! ネットのこっち側、漏れなく全員味方なんだよ!」

俺は当たり前前のことを日向に教えたつもりだったが、表情を見る限りいい方向に転んでくれたようだ。どうも、全部一人でやらなくちゃいけないっていう使命感みたいなのに囚われていたようだからな。その誤解を解いてやれば済む話だ。

「おお……田中が先輩してる……」

「いや俺は元から出来た人間っスからア!」

「田中……か、かつこよかった」

「き、潔子さん……愛してまあああす!!」

「ちよ、こんな所で……っ」

「ああーあ。始まったよ」

「吠えるな野生児!」

「釣り合わないぞ坊主」

「うるせえ縁下、木下あ!!」

と、日向の回復と同時に、チームの雰囲気もよくなったようだ。皆日向を気にしすぎてたからな、肩の重荷が外れたような気持ちだろう。

——さて。

今できる万全の攻撃を、食らわしてやるよ。

たとえ及川徹がいなくてもな。

審判の笛が、体育館に鳴り響く。

危惧していた日向の顔色も、想像以上によくなっていた。むしろ試合できることに高揚しているようにすら見える。

「よし、日向。この前の三対三と同じだ。お前の最高のジャンプとスピードで突っ込んでこい。ボールは俺が持つていく」

「おうっ！」

影山と日向の会話を皮切りに、練習試合は始まりを告げた。

東峰が抜けたあと、田中は前衛スタートになっている。青城側のサーブを澤村が綺麗にレシーブし、Aパスの位置にボールが上がった。影山は現在前衛なので、選択肢は三つある。

一つはレフトで待つ大エース、田中にトスを上げること。二つ目はクイックに入ってくる月島に上げること。最後に、自身のツーアタックだ。

初っ端ツーアタックは相手も念頭に置いてないだろうから決まる確率も高いが、失敗すればおそらく味方の士気は下がってしまう。

色々逡巡することゼロコンマ五秒。影山は迷わずレフトへ高めのオーブントスを上げた。

「田中さん！」

ふわり、と。スパイカーにとつて最高とも言えるトスが大エースの元へと上がった。それを見た田中は思わず口角を吊り上げ、嬉嬉としてそのダイナミックな助走に入る。

日向と同等かそれ以上のジャンプは、宛ら飛翔する鷹——いや、今は龍と呼んだ方が良いだろうか。

そんな田中の前には、県内でもトップクラスの高さを誇る三枚ブロック。

(三枚ブロック上等ツツ!!)

——目の前に立ちはだかる、高い高い壁。

それを躲すにはなんだ？何が必要だ？

田中には、力で押し伏せることができる。さらに、コースをついてブロックに触られないことだつてできる。

——その向こうは、どんな眺めだろうか。

ここは一発、奴らの度肝を抜いてやろう。

——『頂の景色』

その時田中の視界に映るコートの一部が、光り輝いて見えていた。そこに打てと、本能が叫ぶ。俺ならできると、田中が田中を鼓舞する。

大エース。六本の指と田中の違いとはなんだ。

否、違いなどない。なぜなら田中は——

ズダアアアンツツ!!!

——既に大エースたる器を持ち合わせているのだから。

影山から最高のトスを貰った田中は、三枚ブロックのさらにその内側。超インナークロスに強打を叩き込んだのである。

高さ、肩の柔らかさ、的確なミート、全てが組み合わさなければ途端にネットにかけてしまうような、まさに超クロス。

影山の日向に合わせる神業トスよりかは多少劣るが、それでも神業と呼ばれるべきスパイクであったのはたしかだ。

「う、ううおおおお!!!田中さんナイスキーー！」

「田中すっげえなおい！」

「今までそんなのやってこなかったじゃん」

「いや、日向と影山につられたんすかね。多分——俺また成長しました」

日向と影山、並びにチームメイト全員がその瞬間に思ったことは、おそらくシンクロしていただろう。

『田中、カッケェ』と。

「うわっはは、さすが六本指の一人だな」

「こりやマジでウシワカと変わらん」

さて、田中さんにビビったか、ビビったよな。と、影山は青城のコート内を観察する。その会話はこちらに丸聞こえであるため、たしかに相手は田中のスパイクに感心し畏怖しているようだった。

そして続いている影山のジャンプサーブは力んだのか、思わずネットにかけてしまう。しかし悔しがるより先にチームメイトに謝りを入れ、先の失敗の反芻をしているあたりは流石というべきか。

次の相手のサーブも澤村がカットをし、今度は月島のど真ん中を突っ切るAクイックが炸裂。順調な試合運びと言えるだろう。

さて、月島サーブとなったので、ついに日向が前衛に上がってきた。日向と影山は目線を合わせ、領き合う。

月島のサーブは綺麗にカットされ、相手のミドルブロックカーである金田一の移動攻撃プロドにトスが上がる。完全にブロック振られたと思っただが、そこには田中がいた。

金田一のストレートを完全に一枚で威圧感と共に閉め、クロスに打つしかない——となった刹那、日向が斜め飛びで食いついたのだ。

これにはさすがの金田一も驚き、思わず打ち下ろしてしまったので日向の右手に当たり綺麗なワンタッチとなり、カウンターのチャンスを得たのである。

「チャンスボール！」

素早くボール下に入りチャンスボールを影山に上げる縁下。

(このタイミング、この角度で——ドンピシャー！)

ズダンッ!!

相変わらずの影山のトスと信じて飛んだ日向の、電光石火の超速攻が美しく決まった。青城ブロックは文字通り一步も動けず、それは後

衛も同じであった。

「しやアアアアあ!!!」

「日向ナイスキー!」

「アザース!」

「影山もナイスな!」

「うす!」

やはり日向の超速攻は映えるな、と田中は思うが、決まれば気持ちいいので味方の士気が上がることも考えればいいことだと納得する。

「さあ、まだまだ行くぞオ!」

「「おオオ!!」」

—— 新生鳥野、その翼はまだ開いたばかり。

結局その後二セット先取し試合に勝ったことになるがこれは練習試合。約束の三セット目を始めようとしていたが、そこに青城の正セッターで主将—— 及川徹が現れた。

どうやら足首の故障で通院していたようだが、会話を聞く限りでは完全復活らしいと影山は悟る。

「やつほー飛雄ちゃん。元気してた?」

「……うす」

「あれれ、反応薄い。及川さん悲しいなー。にしても、やつぱすごいね田中くん」

「……?お、はい」

思わずおう、と返事をしそうになった田中だが、及川が先輩であることを思い出し間一髪敬語を使うことが出来た。

「やつぱ天才はあれだねえ。……捻り潰したくなる」

「及川、雑談はそこまでだ。アップ念入りにな」

「はーい」

相変わらずの飄々とした態度と、性格の悪さを感じさせる言動だと、影山は思う。



そしてそこで休憩の終わりを告げるタイマーが鳴ったので、コートに選手らが入った。及川は隣コートで既に柔軟体操を始めている。今から始めるのなら、念入りなアップを済ませた後ということは試合終盤になるなど田中は瞬時に判断するが、意味の無いことだと思え考えることをやめた。

今は試合に集中、その一心でコートに立つ。

「やはり影山はうちで取るべきでしたかね」

「うーん。彼がこのチームに来ていたとしても、あのよう<sup>日</sup>に実力を発揮してくれていたとは考えられないかもね。烏野だから。あの五番<sup>日</sup>向<sup>向</sup>がいるから、ああいうプレーをするようになったんじゃないかな」

にしても、と。既に始まった三セット目を見ながら、青城の監督『入畑伸照』は思考を巡らせる。

穴だらけの烏野の守備を広くカバーする、オールラウンダーな主将、澤村君。

クレバーで冷静で、しつこくボールを追い続ける高身長ブロツカー、月島君。

トス回し、ブロック、レシーブ、サーブ。全てにおいて高水準、影山君。

スパイク以外はてんでダメだが、囀の能力の高さとそのバネは驚異的、日向君。

そして何よりも、全国六本の指に名を連ね、強固な三枚ブロック相手でも物怖じせず**に**ぶち破**っ**ていけるまさに大エース、田中君。

これに本来のメンバーである守護神、リベロの西谷君と、パワーなら田中君と同等かそれ以上のスパイカー、東峰君がいたら。

「さらに手をつけられなくなるかもしれない」

なんと末恐ろしい。

——烏野高校。全国に行くための最大の障害は白鳥沢だけだと思っていたが、撤回しよう。君たちも充分脅威だ、とね。

そうこうしているうちに、スコアは二十四対十七。烏野高校のセットポイントである。次のサーブは国見だが、ここでアップを終えた及川がピンチサーバーで入るようである。

「いくよ、皆！」

洗練された自信を感じさせるフォームでジャンプサーブを打つ。その精密なコントロールと強烈さは、レシーブを苦手とする月島へと一直線に向かい、月島は捉えることが出来ずに弾いてしまった。

「ヤーっぱり。メガネくんとそのチビちゃん。レシーブ苦手ですよ」

潰してあげるよ、と。そう言外に告げられた日向は憤慨するが事實は事実。たしかに自分はレシーブが下手だったと落ち込んだ。

しかし、月島は違った。

「もう一本、いくよ」

そう言ってサーブをまたもや月島に向けて及川は打つ。

（僕だって、入部してから田中さんの強烈なジャンプサーブ触ってる。だから——）

ドッパアアン!!

「なっ!!」

——なんと月島は、及川のサーブを二本目にして上げたのである。それはAパスとは言えないが、高くアタックライン付近に上がるBパスと呼ばれる位置だった。

日頃田中や影山のジャンプサーブをイヤイヤ受けに行っていたのには、月島なりの理由がある。それは田中にも直接言われたことなのだが、やはりリベロがない現状狙われるのは月島と日向であるということだ。それを自覚していた月島は、メキメキと成長する日向に若干の苛立ちを感じたため、半ば投げやりにレシーブ練習の機会を増やしていたのである。

その結果が既に如実に現れている。

威力は多少落とし気味とは言え、及川のサーブを二本目で上げたのだ、それはすごいことであると言えるだろう。

そしてBパスに上がるボールを見て影山は一言、充分だ、と漏らした。

日向はBクイックの位置で飛び——否、フェイク。飛ぶふりをした後凄まじいスピードでライト側へブロードを仕掛ける。

（ほんの一瞬。たった一步。それだけの差でもうこいつには追いつけない。追いつけるのはボールだけだ!!）

超速度でコートの中から端まで移動した日向の掌にやはりピンポイントで神業トスが上がり――

「……ツツ」

ズダンツ!!

及川の横を通過したスパイクは、コートのライン上に落ち、烏野の得点。よって三セット全てを烏野が取ったという結果になったのである。

「大王様、倒したー!!」

「うるせえぞ日向ボゲー！浮かれんなー!」

浮かれるのも無理はない。

なぜなら県ベスト4と三セット戦い、全てのセットをかつさらったのだから。

そのあと帰りの挨拶を終え、バスに向かってしていると及川が烏野高校に話しかけていた。それは今の烏野の弱点――守備の弱さを突くものであった。

「どれだけすごいセッター、スパイカーがいても、そこに繋がらないんじゃないよ。俺以上にすごいサーブ打つヤツなんて全国探せばゴロゴロいるだろうし、それに今日のサーブも所詮七割ってところだしさ。なんとかした方がいいんじゃない?」

それだけ言い残して、及川は帰って行った。忠告しに来たのかとも思うが、おそらく嫌味を言いに来ただけだろうと影山は瞬時に判断する。

「キャプテン、なんか言い返さなくていいんですか!？」

日向がそう澤村に問いかけると、澤村はふっふっふ、と不敵に笑いだした。田中もそう言えば、と、思い出したかのように手を叩く。

「そろそろ戻ってくるんだ」

「……………？田中さん、どういう……………？」

日向が田中の言葉に疑問を持つが、それに田中が答える前に澤村は一言、こう言ったのだ。

「鳥野には———守護神がいるんだ」

小さな巨人を指す者と、小さいのにも関わらずコートの中で二二を争うほどのオーラを発する守護神が出逢う時は近い。

歪んだ人と結ばれた人と

『高坂は悩みなんてなさそうだよなー』

『あは、わかるわかる。そういうのとは無縁そう』

『いやいや、これでも結構色々あるぞ?』

『え、そうなん。例えば?』

『んー……嫉妬とか?』

『は、お前が何に嫉妬すんだよ!顔か?』

『まあそれもたまにあるけど。バレーだよ』

『いやそれこそわからん。日本のバレーボール界の未来を担う、期待の新人だろ?何を嫉妬すんだよ』

『……色々あんのっ!もうこの話は終わろうぜ』

『あーい』

—— 圧倒的な高さ。

—— 力だけに頼らない超絶技巧。

—— 自信に満ち溢れた顔。

彼—— 田中龍之介と共にプレーをしていると、自分までもが奮い立たせられて調子が良くなるなんてザラだ。どんな逆境でも笑顔を忘れず、むしろ不敵に笑ってみせるその様は、月並みではあるが本当にかっこいい。

俺、東峰旭は、そんな彼に半ば憧憬に近いものを持っていた。

自分にはない自信を持ち、それを裏付けする確かなバレーセンス。

どんなに辛くても、どんなに疲れても最後までやり抜くその姿勢は感嘆せざるを得ないだろう。

すぐに弱音を吐露する自分とは大きな違いだと、自虐気味に笑ったことは数知れず。しかしそれでもバレーボールは好きだ。いつかは彼の様な——大エースの様な、仲間をも奮い立たせるプレーがしたいと、ひたむきに毎日練習していた。

それでも——あの日、あの試合。

鉄壁と謳われる県内最強ブロック陣を見、そして実際に体感し、俺は恐れ慄いてしまったのだ。いつか彼のようになれると思っていた。どんなに強固なブロックもこじ開けられると思っていた。努力は実を結ぶと——そう信じていた。けれど、それは所詮机上の空論で、泡沫の如き夢幻であつたのだ。

彼は何度も何度もトスを呼び真正面からブロックをこじ開けていった。二枚ブロックの内側を抜いたり、打つ角度を調整してブロックアウトを誘ったり、はたまた意表をついたフェイントで相手のいないスペースにふわりと落としたり。

なるほどパワーだけあつてもバレーは強くなれないわけだ、と思わず自虐する。いつからこんな自虐癖を持ったのだろうかと逡巡するも、それも長くは続かない。なぜなら試合中であるからだ。

ああ、前衛だ。頼むからサーブカット乱さないでくれ、そしてなるべく俺にトスをあげないでくれ。そんな心の奥底に眠る本心を押し殺して虚勢を張り、俺は何度も力強くトスを呼んだ。

最初のうちはよかつた、それなりの自慢でもあつたパワーだけでないとかブロックアウトを取れていたから。だが鉄壁の名は伊達じゃない、そんなのはすぐに修正して、俺というカモを絞めるかのように何度もキルブロックを連発させていく。正直一セット目が終わった辺りから心身ともに限界だつたのだが、それでもまだ頑張れた。俺がいなくとも、彼がいるから、と。

——は？

俺は今何を考えた？

彼が——田中がいるから大丈夫？

何を言ってる。彼がいれば勝てるなんて荒唐無稽な話、認める訳には――

――本当に、そうか？

実際俺には撃ち抜けない壁も、彼には何の障害にもなり得ていないし、バックからも元気にトスを呼び実際決めている。対して俺はどうだ、最高のレシーブ、トスと最大限のお膳立てをしてもらっているにも関わらずいまいち決めきれないじゃないか。

ああ、もう、嫌だ、トス、くるな。

なんでだよスガ、今デユースじゃないか、これで俺が止められたらアドバンテージが相手に行ってマッチポイントを握られてしまうのに。

どうして俺にトスをあげるんだ？

ほら、案の定スパイクは叩き落とされた。やっぱり俺には無理なんだ、強いブロックと戦うなんて。力だけあっても何の役にもたたない、薄々感じていたけれど、ようやく確信したよ。

おいおい嘘だろ、サブカットが乱れた。

こういう時、一番トスを呼ぶべきなのは誰だ？エースだ。だから、そう、俺がトスを呼ぶんだ、そしてちゃんと決め切って次に繋げて――

――俺は、トスを呼ぶことが、出来なかった。

憧憬、嫉妬、羨望、劣等感。

ありとあらゆる感情が俺の中に渦巻いて、どうしようもなくなつて、ついに何かが切れる音がして。

気づいたら俺は自室のベットに横たわり、しきりに涙を流していた。

——青城との練習試合を終えた次の日。

影山飛雄は一人サーブ練習を行っていた。昨日は成功率七割超、かなりいい数字が出ているが、実際相手のレセプションを乱せたかと言われるとそうでもない。確実に、でも強気にをテーマにしていたとはいえ、乱した回数が片手で足りるというのは些か不甲斐ない結果である。

(トス、いい！)

ここ最近で一番しっくりきたトスをあげ、いつもの様にボールを打つ——

——刹那、横から飛び込んできた小さな影が、影山のサーブを完璧にカットした。

「……は」

「いんやあー、お前なかなかいいサーブ打つな！」

「……うす」

「おいおい一年だろ、もっと元気出せよ！」

「……お、お俺より小さい…っ!!」

「ん、だ、と、ゴルアああああ!!!」

場は早くも混沌に。そしてその中で影山は悟った。

(あの素早い動き、そしてサーブの威力を完璧にいなす柔軟性、勢いを殺す技術。そして何よりも——)

——強い存在感。

間違いない。この人こそが！

(烏野の、リベロか！)

「おっ！ノヤっさん！来たのか！」

「うおお、龍ー！ひっさしぶりだなあ!!」

「それよりも聞いてくれよ、昨日は青城と練習試合でな？」

「おうおうそりやすげえな!!」

「そんでよー！」



遅れて到着した田中とノヤっさんと呼ばれた少年が話の花を咲かせている中、影山と日向は困惑するしかなかった。完全に置いてけぼりである。

「おっ、西谷じゃないかー」

「大地さんお久しぶりです！」

「ウンウン大きくなって〜」

「スガさんどこの親戚のおじさんすか…」

と田中が菅原にツツコミをいれた直後、田中が蛇に睨まれた蛙のような機敏な動きで扉を見つめる。この現象をもう皆理解していて、田中曰く潔子さんリーダーらしい。何を言ってるのかよくわからないがそういうことだ、とバレ部一同は無理やり納得しているが。

「みんなおつかれ」

「お疲れ様です潔子さん！今日も可愛いです！」

「……も、もう……っ」

「ああああああああああああああああああ」

「田中!? しつかりしろ田中アア!!」

「き、ききき潔子さあーん!! 愛の抱擁を！」

「しません」

「なら愛のキッスを!!」

「しません」

「せめて愛の握手を!!」

「しません」

「ああああああああああああああああああ」

「西谷アアあ?」

——なんだこれ。と、いつもは変人担当である日向と影山は呆れた目で上級生を見ていた。

場は落ち着き、その後も色々あった。

東峰が未だ戻らないことに西谷が腹を立てたり、もう一人のエースの存在を知った日向が会いたいと喚いたり、結局西谷は部活に戻ることをやめたり。

東峰が部活に来たくない、もしくは来れない理由を、田中はほんの少しだけ理解していた。自分よりバレーが上手いやつの傍にいと、向上心はもちろんだが、嫉妬や劣等感が生まれてしまうことを知っているからだ。

だが、田中はそのことを自分のせいだとは思っていない。いやむしろ、思っただけじゃないだろう。思った時点で東峰への冒涇であり、そもそも東峰自身の問題だからだ。

「ごめん待った？」

「いえ！俺も今来たところですよ！」

「そっか、よかった」

俺——田中龍之介は、今日も今日とて潔子さんと共に下校するために待ち合わせをしていた。

「じゃ、行く」

「はい」

かなりの頻度で一緒に下校するため、暗黙の了解というべきものが俺達には存在する。それは、俺が潔子さんの左側を歩くってことだ。自転車を押しやすいという利点もあったため特に何も言わずにいるが、なんだかこれが当たり前になっていて嬉しいような恥ずかしいような。

「東峰、心配だね」

「……そっすね」

……俺という人間は、なんて浅ましいのだろう。潔子さんはきつと純粋に旭さんを心配しているのだろうが、他の男の話をされるとなんだか面白くない。

……あれ、そういえば俺別に潔子さんと付き合っていないじゃん。なんてこつたい、これじゃあ付き合ってもないただの先輩女子に嫉妬す

る坊主じゃあないか!!

「そ、そういえば潔子さん」

「ん?」

「ノヤっさんに愛のキツスとか色々しません! って言っていましたけど、あれ俺もダメっすかね」

なんとか嫉妬を払い除けよう、そしてさらに会話を盛り上げようと画策し口の赴くままに喋ると、なんとも吃驚な内容が飛び出してしまおうではないか。

え、どうしよう気持ち悪がられてしまう。そんな危惧を抱き始めた俺は、さすがにフオローしなければと声をかけようとする——

「……田中、なら……いいい」

「……へ」

ポスン、と。

俺の胸に潔子さんが抱きついてきたと思ったらとんでもないことを言われてしまった。え、なに? 俺にならないって? それってつまりキスとかも……?」

なんで俺にはいいんだ? キスって普通恋人じゃなきゃしないだろ。もちろん俺は今すぐにも潔子さんとキスしたいけど——ってことは、潔子さんも俺と同じ気持ちということ……なのか……?」

いや確定するのは時期尚早だ、だだだってまだ潔子さんの冗談かもしれないし。

「じよ、冗談、すか? 俺そういうの本気にするタイプなんでやめといった方がいいです」

俺達は立ち止まったが、その場所は奇しくもあの日潔子さんを慰めた所と同一のものであった。

「……バカ、冗談でこんなこと言わない」

なんだこれ、なんだこれ、なんだこれ。

若干涙目になりながらこちらを上目遣いで見上げてくる潔子さん。頬を紅に染めるのは果たして夕日のせいなのだろうか。腕の中にすっぽりと収まる潔子さんは妙に柔らかくて舌が応にでも異性——それも好きな人なのだということを暗に裏付けてくる。

「……きす、しよ」

「……え、あ」

潔子さんが唇を尖らせて目を瞑って顔を近づけてきた。いやまてまてまて待ってください、さすがにここまできたら俺も腹を括るしかないだろう。潔子さんが誰彼構わずこういうことをする人じゃないことは、俺が一番知っている。

つまりは——そういうことなのだ。

俺は潔子さんの肩を両手でガシツと掴んだ。途端に驚きからか目を見開く潔子さんに、俺はありったけの想いを告げる。

「潔子さん、好きです」

ああ、言ってしまった、と。本当はもっと後で言うつもりだった。インハイか、はたまた春高か。全国大会に出場できたらこの想いを告げよう、玉砕覚悟で、と。しかし密かに抱いていた考えはいつも容易く破壊された、他ならぬ潔子さんの手によって。

告白した恥ずかしさで視界が朧気だったのだが、さすがに潔子さんから返事がないのは不安で辛い。

俺は視線を若干下に向け焦点を合わせると、口に両手を合わせてワナワナと震える潔子さんがそこにいた。涙目、というか涙すら流している。

「……っ」

不意打ちだった。

潔子さん喜んでくれたのかな、OKくれるのかな、これから恋人になるのかな。そんなことを考えていたら、気づくと目の前に潔子さん。え、と困惑する暇もなく、唇を潔子さんに奪われてしまった。

「私も、ずっと、好きでした」

涙を流しながら年相応の満面の笑みを浮かべる潔子さんは、普段のクールな印象とはかけ離れていたがそれ故に異常なほど綺麗に映った。

俺の顔は噴火しそうな勢いで熱いし、心臓の音も破裂するのではと心配になるほどである。それはくっついていてる潔子さんも同様なように、目が合うとなんとなく笑みが零れた。

「これからよろしくお願いします、 潔子さん」

「うん……よろしく」

なんだか今日の潔子さんはいつもより年相応というか、素直というか、なんとというか。いつものクールな感じもすこぶる良いのだが、この幼い感じもベリーグットである。

「ね、ねえ……」

「はい？」

「私、さっきの初めてだったんだけど」

「奇遇ですね、俺もっす」

「……よかった」

「え？」

「…も、もうちよつと」

もうちよつと？あとその前なんて言った？そう問いかける間もなく、俺の唇は潔子さんに再び塞がれた。もうちよつとって、キスの催促かよ、なんて考える頃にはもう思考はドロドロだった。

無茶苦茶にしたい、俺の印をつけたい、誰にも渡したくない。汚い感情だというのは自分でもわかっているが、それでも思ってしまったものは仕方がない、もつともつと俺から求めよう。そう意気込んだ瞬間、前方から子供の笑い声が聞こえてきたので思わず潔子さんと距離をとった。

しかし代わりと言ってはなんだが、手を繋いだ。俗に言う恋人繋ぎとかいうやつである。人生においてやる日があるなんて思いもしなかったが、誠に面白いものだな。

子供たちとすれ違っていると、潔子さんはついに腕を絡めてきた。さらに何がと言わないが、当ててんのよ状態である。正直理性が危ない。

「……今日、お父さんもお母さんもないの」

「へあ!？」

「だから、その……泊まりに、こない？」

「な、なんで、」

「つ……続き、したいな、って」

いやいやいやいや何だこの破壊力は。例えるならそう、核爆弾だ。

俺の心の中に住む小市民たちが一人残らずハートを射止められてしまっている。

……少し、冷静になろう。

俺と潔子さんは今日付き合っただけだ、というか今。それでキスはまだわかる、色んな恋愛ドラマでもその展開は鉄板だったからだ。だがしかしその先……続きとなると話は違う。そもそも俺達は高校生だ、もつと健全な付き合いを心がけるべきであるし、倫理的問題とかあれこれ色々あって――

「だめ、かな」

「今すぐにも行きましょう」

―― やっぱり女神には勝てなかったよ……。

「なんか今日の田中やつれてないか？」

「ああ、大地もそう思う？でも反対に清水は元気っていうか色気があるっていうか、ツヤツヤしてるっていうか」

「よく見てるなスガ……待てよ、今日二人は一緒に登校してきたという噂がある。さらになにかと会話することがいつもの倍近い。そしてあの二人の様子。つまり……」

「……朝帰り？」

「そうだ、そうに違いない。部長として、最上級生として言わなきゃいけないことは多分違うんだが、本当に今言いたくてしょうがない」

「奇遇だな、俺もだよ」

「んじや一緒に言おう」

「ん、せーの」

「遅いんだよ全く！末永くお幸せに!!」

いきなり叫んだ三年生二人組に、周囲は怪訝な目を向けるのであった。

エースとは。

『俺さー、高坂と同じチームでよかったわ』

『……なんだよ急に?』

『いやさ、俺も身長で悩んでたし、割とマジでリベロ転向する気だったんだよ。でもお前のこと見てたら俺も出来るって思えたんだ』

『いや、うん、照れるわ』

『はっ!男相手に赤面されても嬉しくねー!』

『うるせえ。まあでも、ありがとな』

『おう!俺やつぱりイケメンだよな?』

『脈絡無さすぎだろあとお前はフツメンだ』

—— 潔子さんと恋仲になってから。

日常は今まで通り流れていた。それこそ最初は先輩同輩関係なく祝福と怨念の祝詞(?)を貰っていたが、それもすぐさまなくなり、俺と潔子さんがカップルというのが日常となっている。

ダダンツツツ!!

「お、田中最近まじで調子いいな〜」

「あざす!愛の力っすかね?」

「ははっ、聞いたか清水〜」

「……(かっこいい)」

「…見惚れて耳に入っていない」

カップルになったのは日常ではあるが、俺たちにとつては非日常だ。もうラブラブもラブラブよ、そのおかげで一時期ノヤっさんと不仲になったりもしたが仲直りはしている。

『龍……お前……お前だけは…親友、だと…!!』

『ノヤ』

『……ンだよ』

『潔子さんの美しい写真は共有しよう』

『親友よ!!』

とかなんとかあったりしたが、未だに写真は共有してはいない。

「にしても明日は町内会チームとの練習試合つすか。それにノヤっさんと旭さんが参加するんですね、大地さん」

「ああ。なんでも日向と影山が色々やってたらしくてな、まあ主に日向だけど。これがあいつらの、いや……あいつ<sup>旭</sup>のきっかけになればいいとは思う」

そう、大地さんの言う通りだ。このチームにあの二人は必要不可欠、何にと言ったらもちろん全国制覇に、だ。俺から見ても旭さんのパワーというものは頭一つ抜きん出ていると思う。そのパワーを上手く活かせていないだけで、旭さんは全国レベルの選手になれる素質は十二分にあるというのが俺の見解だ。

そのパワーの活かし方……俺が旭さんにアドバイスしていたら、現在の様な惨状にはなっていなかっただろう。俺が勝手に旭さんは大丈夫だと決めつけていた。俺にも多少原因はあるのだ。

「言つとくが田中。加減はするなよ」

「当たり前ツスよ、それこそ意味無いことです、むしろ失礼だ」

「ははっ、心配は無用だったな。んじや、今日はあとダウンやって終わりだな。うし、集合!これからダウンに入る!」

——明日の試合。全力を尽くそう。



——バレーボール。

俺がそれを楽しめなくなっただのは、いつからだったか。

田中という超高校級の才能に憧れた。

田中という超高校級の才能に嫉妬した。

田中という超高校級の才能に追い継いだ。

——俺は、田中に追いつくためにバレーボールをしていたように、今更ながら感じる。

「……ははっ」

全くアホらしい。今までの俺も、今体育館の前でビビって一步踏み出せない俺も。根本は何にも変わっちゃいない、俺は俺だ。

「俺は、田中じゃない」

なら俺に出来ることはなんだ？

熱いプレーで皆を引張ること？

状況を打破するプレーをすること？

全てのスパイクを決めきること？

「違う」

俺に出来ることは——点を取ること。

目の前の一点すら見ずに全て決め切ろうとか、チームを引張らなきやとか、先輩だからしつかりしないととか。そういうことじゃないんだ、きつと。

俺は、俺。東峰旭だ。自信なんてないし、バレーボールが上手くもない。でも、目先のプレーに集中することはできるし、きつと点も取れる。

『ボールの重さが手にズシツと来る感じ、大好きなんです!!』

わかるよ。だから……

「まずは、一本」

よく掛け声で言われる言葉、何も理解していなかったじゃないか。まずは一本だ、そうだよ。

今日俺は、憧れ<sup>中</sup>を払拭する！

「なんだ遅刻か舐めてんのか!?!早くアップして俺たちのチーム入れ

！」

「あ、はいすみません」

「日向ナイツサー！」

「うつつ!!」

相手は超速攻の日向が下がり、月島が前衛でブロックの高さが影山と揃って随一に。影山前衛で攻撃は二枚だが、レフトには超高校級スパイカーの田中。隙のない布陣だ。

「ネットイン!!!」

日向のサーブはネットインし、それを嶋田さんが滑り込んで辛うじてあげるが、一本で相手コートに返ってしまう。

(やった、結果オーライ！)

日向は内心心拍数が二百ほど上がっていた。

「チャンスボール！」

大地がチャンスボールをしつかりとセッターの影山に返し、影山は速いタイミングの平行トスを田中に上げる。田中は影山の精密すぎるトスに若干引いていたりもしたが。

(ドンピシャ！ブロック…1. 5枚!!)

ズツツツ———パァンツツ!!!

ブロックを振り切ったトスは、圧倒的高さと圧倒的なパワーを誇る田中が超強打したが———コースを読み切り既に飛び込んでいた西谷が完璧にレシーブをした。

う、

「「ウオオオオオ!!」」

そのスーパーレシーブに、思わず烏野チーム側も叫んでしまう。

「旭！」

すかさず菅原は、東峰の得意とするネットから少し離れた高めのトスを上げた。長年共にプレーしてきた信頼感と上げ慣れていることもあって、トスは完璧である。

「行け！旭！！」

「旭さん！！」

「あつちに肩入れして手抜いたら許さないヨ」

「当たり前だ！！」

「本気で止めに行きますから！！セーラーの！」

東峰のスパイクは一カ月ぶりにコートに入ったとは思えないものだったが…鳥野随一の高さを誇る三枚ブロックに捕まってしまおう――

――が、それも西谷の手のひら一枚、俗に言うパンケーキと呼ばれるレシーブで乱れるもブロックフォロウに成功する。

（どうする、嶋田さんがライトから呼んでる。トスを呼ばない旭より、決定率は――）

（俺が、俺がスパイク何回止められても、何度だって拾ってみせるから、だから！）

「だからトスを呼んでくれ、エース！！」

スパイク一本打つのに、どれだけの過程が必要か。サーブ、スパイクなどをセッターへと持っていくレシーブ。

そのレシーブを、数ある選択肢であるスパイカーの中から、自分を選んで上げてもらったトス。

「スガアアアアアアアアアア！！」

――もう一本！！

「悪いけどまた止めるよ」

「当たり前だ！！」

「影山それしか言ってるねえな」

「行きますよ！セーラーのっ」

完璧な三枚ブロック、だがそれがなんだ。俺のためにスガは綺麗なトスを上げてくれた。このスパイクに繋がるトスのために西谷がレシーブをしてくれた。しかもその西谷がバックを守ってくれている、それがどれだけ心強いことか。

（この壁は、ぶち抜くものだ。何度止められたって、西谷が拾ってくれ。恐れるな、全力でぶつかれ！）

「打ち切ってこそその——」

：ググツ。空中で肩甲骨を下げる。ブロックをぶち抜くために研究していたもの。

（空中で止まってる……そして、ブロックのタイミングが少しズレる）  
一番傍から見ている月島は素早く今の状況を判断する。その眼は流石の一言だが、わかってしまってもどうしようもないの一言だろう。

ズダアアアンツ!!!

タイミングをズラした一発は、上手く重く掌にミートし、三枚ブロックを吹き飛ばす。そのボールの行方は既に壁だ。

——エースツ!!!

## 布石

——旭さんが吹っ切れて復活してから。

日向がエースへの憧れと身長に対する劣等感などを吐露したり、それを影山が一蹴したり、日向が最強の囀を受け入れたり、と様々なことが起きた試合だった。

「GWは合宿を行いたいと思います」

と、顧問である武田先生が一言。

それを聞いて俺——田中龍之介はこう言った。

「合法的に潔子さんとお泊まりってことス力!？」

「田中くんは今回お留守番希望ということまで…」

「ごめんなさい」

タケちゃんはやはり怖い時は怖い。いつもはフワフワとしていて優しい国語教師って感じなのだが。

「以前話した通り、梟谷高校との練習試合ですが…もう一高校参加してください」

——音駒高校。我ら烏野と音駒は、因縁の相手だそうだ。最近ではどちらも全国から遠ざかっていることもあってあまり認知されていないが、お互い古豪だった頃。"ゴミ捨て場の決戦"と呼ばれるその戦いは、文字通り全国にファンがいたのだとか。その音駒高校も最近ではかなり力をつけているらしく、東京都ベスト4も狙える力量と聞く。

「合宿は、梟谷と音駒に合わせて、我々烏野高校が東京都に遠征することになります。三泊四日になりますので、色々準備をしておくように。何か質問はありますか？」

「はい…」

「澤村くんどうぞ」

「スケジュール的には、常に練習試合を回していくんですか？」

「いえ、これは梟谷高校と音駒高校側の提案したものののですが、最初

の一日と二日目の午前は、三校合同による練習を行います。いつもと違う環境は、あらゆる可能性に気づくことがある、のだそうです。二日目の午後と三日目、予定では四日目まで練習試合を行います」

「わかりました。ありがとうございます！」

「それじゃあミーティングはこれで終わります。皆、気をつけて帰ってね」

「「あざした!!」」

「キャプテン、自主練少しいですか!？」

「ん、三十分だけならいいぞ。終わったら速やかに片付けるように」

「おっす!!」

町内会チームとの練習試合が終わったあとだというのに、日向と影山はまだ自主練をする元気があるらしい。俺も練習に付き合いたい所だが、休息も大事。とりあえず潔子さんと手を繋いで……

「その、ごめん。今日は用事があつて……一緒に帰れない」

「……」

「えっと、その代わりだけ……夜は電話、できるから。あと明日お弁当作つてあげるし、だからその……」

「好きです」

「えっ……わ、私も、だよ」

「……」

「……た、田中?……息してないっ」

と、いうわけで今日は俺も自主練をしていこう。潔子さんと帰れないなら早く帰る意味もあまりない。余談だが、最近では潔子さんが漫才的なノリに付き合い初めてくれるようになったのだ。特に先程の会話の最後。バリバリ息してた。普通にしてた。つまり潔子さんが可愛いということである。

「うし、日向。お前にジャンプの真髄を教えよう」

「お、おとおっ!!!かっけえ!!なんですか!?!田中先輩!」

「ズバリ——」"ドンツ"だ」

俺を含め、そして前世も含め。一メートルを超えるジャンプをするような奴らは皆、床を蹴るときに音が鳴る。大地を踏みしめ、それを

踏み台として勢い良く飛翔することが大事なのだ。

「今の日向のジャンプは、生まれ持った天性のバネと身体能力に任せ  
たジャンプだ。言ってみれば軽い。ならそれをどうするかだ」

「母指球に、力を乗せる」

「おっ、影山知ってたのか」

「うす、昔調べたことがあって」

「な、なるほど……？」

「なんで理解してねえんだ日向ボゲ。つまり、今のお前のジャンプは  
ピョピョーンって感じだけど、最後の踏切に力入れてドンツッて飛べっ  
てことだ！」

「なるほど!!!」

「……なんで擬音だけでわかるんだ」

天才型というのは皆こうなのだろうか。

俺？俺は天才でもなんでもない、全部努力と思考による賜物だから  
な。まあ親譲りのバネも多少あったかもしれないが。

「とりあえずやってみて欲しいが、もう一つ言いたいことがあった」

「はい!!もうなんなりと!!」

「変人速攻だが……多分通用しないような奴らがこの先出てくると俺  
は思う」

「っー!」

そう、あの変人速攻はたしかに驚異的だ。世界のどこを探したとし  
ても、中々お目にかかれないレベルの超速攻。しかし……

「確かにだ。たしかに最初はビビる。こんな攻撃があつてたまるかと  
な。だけどそのビビりも次第に薄れるし、更に全国レベルならおそら  
く初めの一セットの中で対応してくるだろう」

「それは……まあ、たしかに。つまり変人速攻の使い所を限定して、普通  
の速攻と織り交ぜながら相手ブロックを翻弄していく……ってことで  
すか！」

「それもまあ、一つの手だな。だけど俺はその先があると思ってる」

「その、先……？」

「……??」

俺と影山の会話に、日向は目を点にしてオロオロしている。自分だけついていけないのが不安なんだろう。だが今から話すことはどちらかといえれば影山の方が大事だから今は無視だ。変人速攻の鍵を握るのは、間違いなく影山なのだし。

「今の変人速攻は、目を瞑った日向の振り下ろされる掌に、寸分違わず影山がトスを合わせている。そうだな？」

「はい」

「なら……そのトスを、日向が目を開けたまま打てたらどうだ？」

「……？それが無理だから日向は目を瞑ってます」

「んーそうだな……打点を通過するトスじゃなくて、日向の最高到達点で止まるトス、って言い方ならわかるか？」

「っ!!トスの勢いを、スパイカーの最高到達点で……殺す」

「そういうこと。でも多分それはめっちゃくちゃムズい。バック回転の量の調節、そしてA、B、C、ブロードと距離も変わってくる」

「でももし、それが出来たなら……」

「ああ——全国制覇も夢じゃないぜ？」

厳密に言えば、これだけで全国優勝できるわけないのだが、言葉の綾である。

「んで、日向も日向だ。どんなスパイクだろうと、主導権はスパイカーにある。もしもあのスピードの速攻を日向が自由に打てるようになっても、打ち分ける技術がなきゃ宝の持ち腐れだ」

「それは、はい」

「まずはボールに慣れることが大切だ、今日から四六時中ボールに触るようにしとけ」

「あ、あいつすー！」

「んで影山は、一朝一夕で出来るような芸当じゃないから、ゆっくり練習していこう。多分インハイも間に合わ……」

「間に合いませんー！」

「なんだ……影山の後ろに炎が見える……それほど燃えているってことか？」

「なあ龍！ジャンフロ打ってくれねえか!？」



「ん、久志はどうした」

「山口にジャンフロ教えててな、今手が離せないんだと!」

ノヤっさんは去年出会った時、かなりオーバーハンドが苦手そうだった。とは言っても、ノヤの苦手は常人の普通か少し得意くらいなのだが……俺のジャンフロで特訓しているので今ではそこのセッターよりオーバーハンドが上手いだろう。

「最近かなり苦手意識なくなってきたろ、なんでまた」

「考えてる事があつてよお」

「おん」

「レセプションのとき、俺一人でコートの後ろ側守れたら……かつこよくねえ!」

いやそれ……普通に考えて無理じゃないか……?

「それが無理でも、コートの三分の二は俺一人で賄えるようになりてえ。そうすれば、他のスパイカーが攻撃に専念できるだろ?」

「たしかに、大地さんとノヤの二人がいたらコートを守れそうだよな……」

「てことでよろしくう!」

こうして、日々は過ぎていく――

「うおおおお!!あれが東京タワー!」

「おい日向ボゲ!!どう見ても、す、すかいつりー、だろうが!!」

「ぷぷぷ、ただの鉄塔に決まってるデショ。これだから単細胞バカは」

「「んだと月島コラア!!」」

「息ぴったり。気が合うねえ単細胞同士」

一年生たちはいつものように和気あいあい(?)としている。それを尻目に、大地は東京タワーと想ってたものがただの鉄塔だったことを知り内心冷や汗をかいていた。

「着いたぞお前ら！梟谷学園だ！」

「ありがとうございます！皆、自分の荷物と一緒にボールとかも持つてけよ、一年率先して！」

鳥養コーチ、武田先生の運転のもと、朝イチから出発したバスはついに停止した。大地の声に合わせて皆で感謝を述べ、バスから荷物を下ろしていく。

「潔子さん！髪型、今日はポニーテールなんですね、めちやくちや似合っけて美しいです！」

「っ……好き」

「あっこれ死ぬやつやわ」

「……田中？……ほんとに息してない……！」

「へいへいへーい！黒尾久しぶりい！」

「だなく木兔。身長伸びたか？」

「え、まじ!？」

「いや髪の毛ポリウムだな、すまん。勘違いだ」

「なんだよ喜び損じやねえかよ!!」

「大丈夫です木兔さん、学年は最高学年ですから」

「なんの慰めにもなつてねえよ赤葦い！」

「……皆うるさい」

「おー研磨！やつと起きたか！」

「犬岡はまだ寝てる」

「大丈夫大丈夫、やっくんが叩き殺すから」

「……（ツツこまないから）」

「……うちもちだけど、あつち音駒もだいぶ騒がしいよねえ」

「むにゃあ……お腹すいたあ」

「今日一緒におにぎり作ったでしょ、どうせつまみ食いしたんじやな

「いの?」

「あは、バレたあ?」

……フクロウとネコとカラス、邂逅する時は近い。